

平成29年度 多様な担い手育成事業



技術を 学び 仕事を 知る

地域の担い手を応援する
林研活動情報集

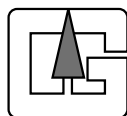


全国林業研究グループ連絡協議会

平成29年度 多様な担い手育成事業

技術を 学び 仕事を 知る

地域の担い手を応援する
林研活動情報集



全国林業研究グループ連絡協議会

まえがき

い ま、私たち全国の林業研究グループメンバーにとって、林業を担っていく人をどう育てるか、どう確保するかが大きな課題といえるでしょう。それは1世帯の後継者というだけではありません。さまざまな林業現場、経営の現場を担う人の力があつてこそ、地域全体の成長を描くことができるからです。

私たち林業研究グループメンバーをはじめ全国の仲間たちは、これからの林業を支える人材を育成する活動に寄与するため、一丸となつて全国キャンペーン運動を繰り広げてきました。昨年度に引き続き、地域の林業後継者や将来を担う未来の就業者、新たに林業に就業したい人々、そして女性に向けたさまざまな支援活動です。

今年度の全国キャンペーンでは、全国の林研グループ等がリーダーシップを発揮し、次のような活動を実施してきました。

高校生や大学生など若い層を対象としたインターシップ、林業経営・就業体験、林業技術研修等、小・中学生に対する地域の森林・林業を学ぶ体験学習などです。林業機械、ICTなどさまざまな技術を学ぶ活動がとりわけ注目されます。若い世代の関心は、技術のしくみや機能へ向かい、林業という仕事の魅力を心に刻んでもらうことができました。

また、女性の林業就業を支援する活動も全国に広がりました。体力面での男女差を考慮する中で、林研グループの活動から、安全に、無理なく働ける就業環境づくりの工夫やアイデアが生まれ、男女共通の魅力ある職場づくりへ寄与する成果も生まれています。

このような全国での支援活動は、私たちの仲間だけで実行できるものではありません。小・中・高校や大学等、地域の教育関係者、地域の小・中・高の先生たち、保護者の方々、そして技術指導などを支援する林業関係者の方々の理解と協力を得て、はじめて効果のある活動づくりが可能になります。

本書は、後継者の育成支援、林業就業促進活動等はもちろん、林研グループ等の活動、さらには地域の仕事創出支援に欠かせない生産技術や流通ノウハウを実践活動事例から紹介したものです。

ここには、机上では得られないノウハウ、ヒントの数々が盛り込まれています。活動を振り返り、またこれからの全国キャンペーンをいっそう実り多いものにするために、ぜひ本書を役立てていただければ幸いです。

本書の取りまとめに当たりましては、小・中学校、林業関係高校、大学校等教育機関、都道府県林業普及指導員、市町村、森林組合、森林所有者のみなさん、全国林業改良普及協会ほか、大勢の方々のご協力をいただきました。深く感謝いたします。

平成30年3月

全国林業研究グループ連絡協議会

会長 田爪弥栄

まえがき…………… 3

第1部 地域の森林と林業技術を伝える活動

学校と林研連携で行う間伐実習、
高性能林業機械の体験実習

茨城県林業研究グループ連絡協議会「茨城県」…………… 8

170年生のスギ丸太を前に
江戸時代から続く林業を伝える

埼玉県森林協会林業研究グループ部会「埼玉県」…………… 12

デジタル測量・高性能林業機械操作体験
農林業高校生に就業体験講習会

山梨県林業研究グループ連絡協議会「山梨県」…………… 16

学年別プログラムで林業就業を支援

NPO法人北信州の森林と家をつなぐ会「長野県」…………… 20

伝統的な林業地で伐採から製材まで
林業大学生の総合的な研修

加子母優良材生産クラブ「岐阜県」…………… 24

チェーンソー伐倒や高性能林業機械作業
高校生の林業研修を指導

上益城地区林業研究グループ
連絡協議会「熊本県」…………… 28

林業を伝える活動

親子参加型教室から高性能機械研修まで

大田原市林業振興会「栃木県」…………… 32

中学校と連携で20年継続

生徒への間伐体験支援

額田^{ぬかた}林業クラブ「愛知県」…………… 36

復興・発展に向け子供と女性に笑顔を！

―木に触れる、木工体験―

田^た人^{ひと}林業研究会「福島県」…………… 40

チェーンソー、刈払機安全講習から

山菜加工・販売まで

穴水町林業研究会女性部「石川県」…………… 44

第2部 林研グループに期待！

境界情報共有、人材育成、定住化の支援

林研グループに期待！

境界情報共有、人材育成、定住化の支援

編集部…………… 50

第3部 私たちのチャレンジ！モノづくり、仲間づくり

スギの葉染め体験でエコツーリズム 東吾野女性林研ときめ木「埼玉県」……………	60
---	----

山菜を出荷したい！ 岩国地区林業研究グループ連絡協議会 女性部会「山口県」……………	62
--	----

樹上作業技術の研修会を開催 愛媛県林業研究グループ青年会議「愛媛県」……………	64
--	----

継続20年！小学生の駒打ち体験 菊池市内の3林研グループ「熊本県」……………	66
---	----

コンテナ苗の育苗技術を高める！ 茨城みらいの苗木研究会「茨城県」……………	68
--	----

体験しながら学ぶ「 こしはな 迫林間学校」 一迫林業研究会「宮城県」……………	70
---	----

間伐材のゲーム盤（ウッドソリティア） ねころやま 根来山げんきの森林業研究会「和歌山県」……………	72
---	----

東京のアンテナショップでクラフト販売 こもれびの会「栃木県」……………	74
--	----

特産タケノコ「ニガタケ」の島外出荷 種子島姫竹 ひめたけ 古田生産組合「鹿児島県」……………	76
--	----

親子キャンプで森林づくり体験 東京都林業研究グループ連絡協議会「東京都」……………	78
--	----

デパートのイベントで林業の情報発信 静岡市林業研究会「静岡県」……………	80
---	----

平成29年度多様な担い手育成事業 実施グループ一覧……………	82
--------------------------------	----

第1部

地域の森林と 林業技術を伝える活動

事

インターンシップ

例

学校と林研連携で行う間伐実習、高性能林業機械の体験実習



「チェーンソーは刃が命」。
目立て実習ではゲージに沿って正確な角度を体で覚える

茨城県林業研究グループ連絡協議会

「茨城県」

県林研と林研グループ、
高校、林業関係機関の
連携による林業体験学習

茨城県の県土面積は約61万haで、
その3分の1ほどを森林が占めて
います。全国平均と比べると森林

率の低い県ですが、森林の6割に
当たる約11万haが県北部に集中し、
古くから林業の盛んな地域となっ
ています。

茨城県内で17の林業研究グルー
プをとりまとめ、中心的な活動を
行っているのが茨城県林業研究グ
ループ連絡協議会（あきやま 稚山興一いっし 会
長、以下、県林研）です。県林研
は、平成18年度から林業後継者育
成・確保支援事業などを実施し、
県立大子清流高等学校（以下、清
流高校）のインターンシップ活動
を支援してきました。活動にあた
っては、「林業の担い手としての
専門的な知識や技術の習得を推進
する」ことを目的として、地元の
林業研究グループである大子町林
業研究グループ（以下、大子町林
研）の協力・連携の下、林業体験
学習を実施しています。

一方、大子町林研（ふたかたみね 二方峰一郎
会長）は現在会員数16名（全て男

性）、主な活動は清流高校の林業
体験支援（間伐実習、高性能林業
機械の操作体験）のほか、巡回に
よる間伐推進などを行っています。

12年目を迎えた 林業体験

清流高校は、県内で唯一の林業
関係学科を有する高校です。平成
16年の開校以来林業関係学科があ
り、現在の3年生が12期生となっ
ています。また、今年度にはこれ
までの森林科学科が学科改編によ
り農林科学科となり、森林・林業
を学ぶ森林科学コースと、農業・
食品加工を学ぶ農業科学コースが
設置されています。生徒は大子町
出身者を中心に県中北部や隣接県
からも集まっており、里親制度に
より全国から生徒を募集してい
るのが特徴です。

12月1日には、日頃林業を学ぶ
生徒たちを対象にして、学校が管

理する奉行平演習林（県有林）にて間伐実習が行われました。

この実習には森林科学科（2・3年生）、農林科学科（1年生）の生徒全員が参加し、3年生13名（うち女性2名）、2年生5名（うち女性2名）、1年生16名（うち女性1名）の34名に加えて、清流高校の教諭6名、大子町林研の会員7名、県林研、茨城県林業技術センター、大子林業指導所と総勢50名を超える大所帯となりました。

生徒全員が伐倒を体験

関係者が全員そろった午前9時半ごろ、県林研の稲山会長の挨拶から実習がスタートしました。生徒たちは学内でチェーンソーに触れる機会は少々あるものの、山の現場で扱うのは年に数回のため、指導員からの注意事項に真剣に耳を傾けます。



演習林に入り、戸辺副会長より伐倒の基本について話を聞く高校生たち

演習林では、まず指導役となる大子町林研の会員が伐倒のデモンストレーションを行いました。演習林はスギ・ヒノキの人工林で、やや間伐遅れのため全体的に混み合っています。デモでは、わざとかかり木をつくり、木回しやチルホール等の手道具を使って伐倒木を安全に倒す様子が実演されました。かかり木処理では、大子地方で古くから用いられている長さ3mほどの「^{かぎ}鉤棒」も使用されました。

その後、1・3年生の混成で6班（5・6名）が構成され、班に分かれて間伐実習が実施されました。各班に1名の指導者が付き、生徒たちは順番に1人1本以上の立木を伐倒します。受け口を作ってから追いを入れ木が倒れるまで、生徒は指導員からマンツーマンで手ほどきを受けます。ヒノキ林の方に回った班ではかかり木になる割合が高く、鉤棒が活躍していました。

生徒たちは、伐

倒した木の枝払い・玉切り・集積までを一通り行いました。1年生にとっては足場のよくない山での初めての作業となるため、1つ1つの動作を考えながら進めていくのに対して、3年生は手慣れた様子で伐倒から集積までをこなしていくのが印象的でした。実習に同行した教諭は、



いざ、間伐実習スタート！
まずはチェーンソーの安全な始動

「森林科学科にはもともと林業に興味があつて入学してくる子が多い。実習を見ていても、生き生きとしています」と、安全対策を徹底した上で、優しく生徒たちを見守っていました。

大先輩からチェーンソーの手ほどきを受ける後輩たち

それぞれの班で流れがつかめかけてきた頃にちょうどお昼休みと



伐倒したスギ・ヒノキは1mほどの玉切りと枝払いをして、班で協力して集積。チームワークよく作業が進んでいく



間伐する木をどこへ倒すか、受け口をどう作るか、丁寧なマンツーマン指導が班ごとになされる

なり、昼食後には各班で目立て実習が行われました。班で使っている1つのチェーンソーを生徒たちが手分けしてヤスリを入れていく間も、指導員は「チェーンソーの刃が切れなくなると危険も疲労も増えるため、目立ては

大切な仕事の1つ」と、作業の意味を伝えていました。チェーンソーが再びよく切れるようになった午後、残りの間伐実習が行われました。高校生はのみ込みも早く、午前よりも多くの木が倒れていきました。来春に林業関係の仕事が内定している3年生は、「木を伐つて倒れるときの風景が気持ちよい。林業の仕事は、はじめは大変そうだったけど、今は楽しみ。グラップルやフォワード、ハーベスタなど、機械にも乗ったことがある。地元で就職できるのはうれしい」と、林業に対して大きな期待を寄せています。

清流高校の卒業生の進路として、就職組の3分の1ほどが例年林業・林産業関係の企業・組織に就職しているそうです。指導役も務めた県林研の戸辺洋一副会長は「自分も大子町出身だが、その頃は3学年で1000人を超える大きな高校だった。今日来ている指導員の大半が大子の高校出身なので、今日は先輩が後輩に教えているようなもの。高校生たちにはできれば地元に残ってほしいし、欲



実習が無事終わってホッと一息。指導員の皆さんに全員でお礼と感謝の言葉



実際の皆伐現場での高性能林業機械の操作実習

を言えば林業をやってほしい」と胸の内を明かしました。

**高性能林業機械の
操作実習**

間伐実習の後、12月12日には2

年生4名を対象にした高性能林業機械の操作実習が、太子町森林組合戸辺班が作業中の皆伐現場で実施されました。

現場にそろっているプロセッサ、フォワーダ、グラップルについて、戸辺班長

がそれぞれの機械の機能や、はたらきを説明するとともに、デモンストレーションが実施されました。その後は、生徒たちが林業機械の操作を体験し、午後には生徒たちが自由に機械を選んで操作できる時間が取られました。生徒たちからは「最初は怖いと思ったが、丁寧に指導していただき楽しく



機械実習も無事終了。これから将来の林業の担い手が生まれることを期待して、記念撮影

操作ができた」、「すでに林業の仕事に就こうと思っていたが、今回の体験でますますその想いが高まった（女子生徒）」という感想に加え、オペレーターに「なぜ林業の仕事に就こうと思ったのか」という自分たちの将来と重ね合わせた質問も投げかけられました。

県林研と太子町林研が連携して行う高校生のインターンシップは、



プロセッサ造材やフォワーダ搬出を体験。
間伐実習では体験できなかった機械のパワーに感動！

次世代の林業の担い手へバトンを
渡すための貴重な
機会となっています。

＊まとめ 編集部

事

インターンシップ

例

170年生のスギ丸太を前に 江戸時代から続く林業を伝える



秩父農工科学高校の1年生 40 名が飯能市の林業家を訪ねる

埼玉県森林協会林業研究グループ部会

「埼玉県」

西川林業地の経営を学ぶ

埼玉県下の林業研究グループ 10

団体で組織している埼玉県森林協会林業研究グループ部会（大村雅恵部会長、以下、林研部会）では、

平成18年度以降、埼玉県立秩父農工科学高等学校（以下、秩父農工科学高校）森林科学科の生徒を対象にしたインターンシップに取り組んでいます。

平成29年度もメンバーである西川林業クラブ（田島哲也会長）と連携して、10月31日、1年生を対象に飯能市で開催しました。



170年生のスギ丸太に生徒たちも感激！

埼玉県の森林面積は12万1260 haで県土面積の約32%を占めていますが、大半が県の西部に集中しています。

飯能市も埼玉県の西部に位置していて、東京都心から40〜60km圏

と比較的至近距離にありながらも、自然が豊かな地域です。江戸時代から続く西川林業地の中心部にあって、人工林率は80%を超えています。

森林面積の9割が私有林で所有の規模は小さいですが、昔から優良材生産のための集約的な施業を行ってきたところです。

秩父農工科学高校の 森林科学科1年生を対象に

秩父農工科学高校の森林科学科は平成6年度に新設され、森林を中心にした広範囲の知識や技術を学ぶ学科ですが、母体は明治の学校創立時からある林業科で、歴史ある学科です。

埼玉県では森林関係の学科があるのはこの高等学校のみで、測量、土木、環境、森林、林産加工、情報処理の知識・技術を学んでいます。所在地は秩父市です。

インターシップ当初から携わってきた森林科学科の宇梶一哉教諭は次のように語ります。

「生徒の大半が森林や林業のことを知らないで入ってきますので、林業と言ってもピンと来ないと思います。学校の演習林を利用して実務も教えていますが、その利用にも限界があります。」

その点、インターシップは、半日という短い時間ですが、生産

の現場に行つてプロの方から林業の話を直接聞くことができ、貴重な体験の場となっています。森林・林業への関心を深める1つの動機づけになってくれればと思つています」

林業の大きな役割 産業面からも環境面からも

インターシップ当日の10月31日には、昼頃にバス2台に分乗して学校を出発。飯能市の東吾野にある林家の井上淳治さんを訪ねました。

井上さんは西川林業クラブのメンバーであり、埼玉県森林協会の会長も務め、この間にインターシップの講師を務めてきました。木楽里きらくりという体験型の木工房も経営しています。

井上さんは80haの山を所有していますが、大半がスギ、ヒノキ林です。

所有林に着くと、井上さんはさつそく林業作業の一連の話を始めましたが、生徒たちに問いかける形で、わかりやすく説明していきます。

「何のためにスギ、ヒノキを植

えていると思いますか？」

「このあたりでは数ある樹木の中でスギ、ヒノキは利用しやすくて、また育てやすい方なんです。それで江戸時代のころから東京、昔は江戸ですが、その需要に応えてきたし、山間部の私たちの暮らしも支えてきたのです。林業が大切な産業となっているのです。」

林業は、きちんと手を入れてゆけば環境を保全する力が大きく、林業は産業面からも、また環境面からも大切な役割を果たしているのです」

さんは何個かのかじられたような樹の実を手にとって生徒たちに聞きます。

「この実はどうしてこうなつたと思いますか。……実はこの森にはムササビが棲んでいるんです。ムササビは前脚・後脚を拡げてグライダーのように樹と樹の間を滑空するんですが、そのムササビの食べ残しです」

「わあー、見てみたい」
「夜行性なので、昼間は樹の洞あたりで休んでいて、残念ですが今は見られないですね」



インターンシップの講師を務めた
井上淳治さん

そんな井上さんと生徒の会話も聞こえてきます。

山を案内する中で、生徒たちが一番感激したのは170年生の採材されたスギ丸太を見たときです。

「この丸太は何年生だと思えますか。年輪を数えてみればわかりますが、170年生です。170年前と言えば江戸時代の末期、天保

年間の時代にあたり、大飢饉や百

ムササビが舞う森で 林業の経営から歴史までを 学ぶ

山道を進んでゆくうちに、井上



木工房「木楽里」での各種木工品

姓一揆などがあり、大変な時代に
この樹は生まれたのです。それか
ら江戸時代が終わり、明治、大正、
昭和、そして平成と生き続けてき

たのです」

「へえ」と感嘆する生徒の声
が聞こえてきます。また「この樹
は伐るのにどれくらい時間がかか



手入れされたスギ林

りましたか」などの質問も出まし
た。

このような感じで、山の中のイ
ンターシップは、林業経営に限
らず生物や歴史の話にも発展する
のです。

2時間余り山での説明を終えて
からは、トイレ休憩を兼ね、井上
さんが経営する木工房「木楽里」
へ移動。

木楽里は、一般の方に本当の木
の良さを伝えたいと平成9年にオ

ープンさせた体験
工房で、材料と製
作の場を提供して
います。その工房
で制作中の学習机
や椅子、小物製品
などを見学して、
インターシップ
は終了しました。

「埼玉県では林
業関係の職場が限
られていて、森林
科学科を卒業して
も林業関係に就職
する生徒は少ない
ようですが、この
インターシップ
のことを思い出して、1人でも2
人でも多く林業に就いてもらえる
と嬉しいです」と井上さん。

林研部会の視察で ステップアップへ

ところで埼玉県林研部会を組織
する10団体の中には、県下の女性
で組織している結木(ゆきぎ)の会や、秩父
地域の大滝山林振興協議会、秩父
森林活用研究会、それから西川林
業地域と呼ばれる飯能市近辺の西



埼玉県林研部会の
大村雅恵部会長

埼玉県林研部会の
大村雅恵部会長
は、まず齋藤
代表取締役か
ら経営全体の
概要を聞いた
後、森林認証
の森林や主伐
の現場を視察
しました。ま
た鹿沼市の花
木センターや
新設された近
くの小学校の
木造校舎も見
学しました。
「齋藤さん
の熱い話に、
地域に生きる
同じ林研グル
ープの仲間と
して改めて刺
激を受けまし
た」と大村部
会長は語って
くれました。
この視察を機
会に、林研部
会としてもさ
らなるステッ
プアップが
期待されてい
るのです。
*まとめ 編集部

今年度の視察は9月29日、栃木県鹿沼市の（有）高見林業を訪ね

「せっかく県全体の林研組織があっても、他のグループのメンバーの顔もわからない、どのような活動をしているのかもわからないのでは、もったいない。林業視察は新たな知識・知恵を身につけることが主眼ですが、県内に散らばるメンバーが少しでも会う機会を増やし情報も共有してゆきたいと思い、始めました」と大村雅恵部会長。

川林業クラブ、東吾野女性林研と
きめ木などのグループがあり、そ
れぞれ独自の活動を活発に行っ
ています。
それに対して林研部会の活動は
これまで紹介してきたインターン
シップに限られていましたが、今
年度からは新たに林業視察を加
えました。



林業経営の概要を聞いて山へ

高見林業では、まず齋藤代表取締役から経営全体の概要を聞いた後、森林認証の森林や主伐の現場を視察しました。また鹿沼市の花木センターや新設された近くの小学校の木造校舎も見学しました。



埼玉県林研部会のみなさん（栃木県の高見林業の山林で）

事

インターンシップ

例

デジタル測量・高性能林業機械操作体験 農林業高校生に就業体験講習会



高校生による小型ハーベスタの操作体験

で幅広い活動をしているNPO法人などで構成されており、平成28年度末時点で、13団体のメンバーで活動しています。

各構成団体は、森林整備ボランティアや参加型林業体験教室、在来動植物の保護活動などを行い、林業の普及や森林環境教育活動に励んでいます。

農林業高校を対象とした 林業就業体験講習会

各構成団体が様々な林研活動を展開する中、県林研では、将来の林業を担う高校生を対象に林業就業体験講習会を開催しています。

対象としている高校は、山梨県内唯一の農林業専門高校である山梨県立農林高等学校（以下、農林高校）です。農林高校には、森林の総合利用を学ぶ「森林科学科」があり、林業関係への就職実績もあります。

林業就業体験講習会は、「測量・林業機械講習会」と「高性能林業機械等講習会」という2つの内容に分け、毎年開催しています。

測量・林業機械講習会

測量・林業機械講習会は、デジタルコンパスによる測量とチェンソーの基本構造、整備に関する知識と技術を身につけ、林業に対する意識と理解を深めてもらうことを目的に実施しており、今年度は10月30日に2年生27名を対象に行いました。

◆デジタルコンパス測量講習

デジタルコンパス測量の講師は、栃木県に会社を構える晃洋設計測量（株）の平沢さんです。平沢さん自身も栃木県で林研活動をしているのですが、縁あって山梨の高校生への講師を引き受けていただいています。

山梨県林業研究グループ連絡協議会

「山梨県」

13団体のメンバーで
構成される山梨県林研

山梨県林業研究グループ連絡協

議会（以下、県林研）は、地元の

若手林業従事者で作る団体や地域



真剣に説明を聞く生徒は、すぐに操作を覚え、測量開始

講習では、まず座学により山林の測量がこれまでどのように行われてきたのかを紹介しました。山林で仕事をされている多くの方に馴染みのあるポケットコンパスを使い、その仕組みとメリット・デメリットについて、写真を交えながら伝えます。講習内容の都合上、どうしてもデメリットが多くなってしまうのはご愛嬌です。

続いて紹介したのが、デジタルコンパス。多くの面で作業効率の向上が図られているデジタルコンパスによる測量の利便性は、まだ測量に馴染みのない高校生にも十分伝わったようで、非常に驚き、感心していました。実際、講習後に書いてもらったアンケートでは、多くの生徒がデジタルコンパスによる測量に興味をもっていました。

座学の後は、屋外でデジタルコンパスを使った測量実習を行いました。皆、慣れない機器の扱いに戸惑っていましたが、それも最初だけで、すぐに使い方を覚え、楽しそうに測量していました。

講師の平沢さんは、「ゲームやスマートフォンに慣れている世代のせい、か、一度の説明だけで操作を覚え、ゲーム感覚で測量しているのには驚いた」と感想を語っていました。

平地での測量が物足りなかったのか、林内での測量をやりたいと非常に心強い感想をアンケートに書いてくれた生徒もいました。

◆チェーンソー講習

チェーンソーに関する講師は、(有)佐藤林業を始めとする地元造林業者の方々です。「地元の高校生が、林業に興味をもつきっかけ作りに協力したい」と、皆さん、毎年快く講師を引き受けていただいています。

講習では、まずチェーンソーの基本構造、メンテナンスの仕方に関する動画を見てもらいました。

動画を見終わった後は、いくつかのグループに分かれ、メンテナンスの講習です。分解組み立ての方法や使用後に木くずが詰まりやすい場所、目立ての仕方を講師の皆さんがユーモアを交えながら説明しました。

生徒は、目立ての難しさに悪戦苦闘していましたが、講師の方々は、「昔は自分もうまくできなかった。焦らず基本を覚えて、何度も挑戦することが重要だ」とやさしく丁寧に教えていました。

目立ての作業がひと段落ついたところで、実際に丸太を切る実習に移りました。生徒は自分たちが目立てをしたチェーンソーの切れ味に一喜一憂しており、日々のメ



プロの技を盗もうと真剣な眼差し

による省力化と安全性の向上を学び、昔ながらの林業から想像される重労働で危険な仕事というイメージを払拭し、林業界への関心を高め、就業を考えてもらうことを目的に実施しています。

講師は、先

メンテナンスの大切さを肌で実感していました。

高性能林業機械等講習会

林業就業体験の2つ目は、高性能林業機械等講習会です。

こちらの講習会は、毎年、1年生を対象に実施しています。林業に興味があり入学してきたとはいえ、まだ1年生。正直なところ、将来の夢や具体的な進路を、どこまで考えているかはわかりません。本講習会は、林業機械技術の発展

進的な林業機械の導入や開発に携わり、山梨県内はもとより、全国的にも知られている(有)藤原造林の藤原社長および社員の方々にお願いし、県内の北杜市において、同社が所有する土場と林業機械を使わせてもらい、より現場に近い体験ができる講習会としました。今年度は11月16日に、1年生29名を対象に実施しました。まずは、県林研の明石会長より、「私はどんなぐりバンク事業で広葉樹の苗木生産・供給に取り組んでいるが、

今日の高性能林業機械を使用する伐採・造材作業は、林業において最もエキサイティングな工程。この体験を通じ、森林や林業をより好きになってもらいたい」とあいさつがあり、研修が始まりました。



講師の藤原社長から機械の説明

ボ、③グラップル、④薪割り機の高性能林業機械を含む4台です。4班に分かれた生徒たちは、それぞれのオペレーターから機械の説明を受けた後、実際に運転席に座り、レバーやペダルを操作して丸太を掴んだり、移動

◆高性能林業機械等操作体験

今回、操作体験した林業機械は、①小型ハーベスタ、②マルチグリッパ付きバケット(グラップル機能とバケット機能を併せ持つ多目的のアタッチメント)のザウルスロ

つという間に山積し、また出かけていく光景を目の当たりにし、生徒たちもそのスピードに驚いていました。

また、日本に2台しかないというノルウェー製薪割り機の作業で

丸太を掴んだり、移動したりする動作を体験しました。生徒たちが手足の操作に戸惑っているのと、「頭で考えるのではなく、いっぱい動かせば体が覚えるから」と、いとも簡単に操作する熟練オペレーターに憧れたのは私だけではなかったと思います。講習会の最中には、近くの現場から搬出されてきたアカマツとカラマツ丸太を積んだトラックが土場に到着し、グラップルであ

今回、講師をお願いした藤原造林の若い社員の中には、農林高校の卒業生もいたことから、生徒たちには身近な職業として感じても

は、「クヌギやナラは火持ちが良
いから暖炉に使われ、アカマツは
火力が強いから陶芸に使われる」
と樹種により用途が異なっている
ことの説明を受けているうちに、
あつという間に薪の山ができてい
ました。



薪割り機を使えば大変な薪割り作業もスムーズ

◆隣接カラマツ林や
チップボイラー施設の見学
操作体験の合間には、藤原社長
から、講習会場の周りに広がるカ

徒からは、「寒い中、大変だった
けれど楽しかった。ぜひ、就職さ
せてください」「林業大好き。オ
ペレーターになりたいと思った」
など、うれしい感想を聞くことが
できました。

らう良い機会
となりました。
研修後の生



ザウルスロボ（マルチグリップ付きバケット）の
操作にも挑戦

ラマツ林での施業や、作業道の設
置状況の説明とともに、隣接する
ゴルフ場に今年導入したチップボ
イラー施設の見学もさせていただ
きました。藤原造林では周辺の松
くい虫被害木を利用して、チップ
を製造し、この施設に納入してお
り、「遠いサウジアラビアから輸
入した石油を燃やすより、近くに
ある松くい虫被害木を利用したほ
うが絶対に地球にやさしいから」
と、取り組みに対する藤原社長の
強い思いは、生徒たちにもしっか
りと伝わったと思います。

若者の林業への関心と 新規就労を目指して

講師の方々が、講習終了後、口々に語っていたのは、この講習会がきっかけとなり、「林業への関心」「林業のやりがい」「林業の新たな発見」を感じて、1人でも多くの高校生に林業界への就業を希望してもらいたいという強い思いです。

林業従事者の高齢化が叫ばれる中、少しずつではありますが、若者の新規就労は着実に増えています。それは、今回の講師の方々のように、林業に対して熱い思いを抱いている人たちの地道な活動が実を結んでいるからだと思っています。

この講習会は、「林業のプロから直接指導を受けられる『授業』」として、毎年の開催を農林高校から期待されています。県としても、県林研が行う若い人材の育成に向けた活動をこれからもサポートしていきたいと思っています。

*まとめ

山梨県林業振興課 普及指導担当

事

インターンシップ

例

学年別プログラムで 林業就業を支援



農林高校3年生は、高性能林業機械研修と伐木造材研修を行った

NPO法人北信州の森林と家をつなぐ会 〔長野県〕

北信州の森林と
まちづくりのために発足

NPO法人北信州の森林と家をつなぐ会（以下、当会）は、長野県北部の北信地域（中野市・飯山

市・山ノ内町・木島平村・野沢温

泉村・栄村）を活動地域として、

北信州の自然素材をふんだんに活用した健康的で丈夫な家づくりと、

森林整備により健全で丈夫な山づ

くりを促進し、自然豊かな北信州

のまちづくりを創造することを目

的として平成14年に発足しました。

地元の高水林業協議会の林業グル

ープ部会（以下、グループ部会）

に所属しています。

かつて、北信州地域には地方林

研が2グループあり、その1つの

中高林研では他に先駆けて昭和60

年に搬出間伐により間伐材を売っ

て資金稼ぎをするなどし、地域で

の間伐の普及活動に力を注いでき

ました。その後、県の地方事務所

統合により北信地域が1つとなり

グループ部会が誕生。2つの林研

グループはグループ部会へ統合さ

れました。

グループ部会では、長野オリン

ピック開催に向けてオリンピック

道路沿線のスギ枝落としや、バイ

アスロンコース周辺整備などに協

力し、地域で林業普及のPR活動

を行ったりしていました。

地域材利用促進活動
メンバーは建築士、工務店、
製材業者、森林組合職員

そうした中で、平成9年から中野市を中心に列状による搬出間伐が行われるようになり、間伐材が多く生産されるようになりました。しかし、生産された間伐材のほとんどが木材市場から県外へ流れていました。これは、この地域が直江津港に近かったことから、木材輸入自由化以降、工務店、大工さんなどは外材使用に長い間依存してきたため、地域材流通がなかったことに起因しています。

こうしたことから、林業の側の林研活動だけでは、流通の現状を打破することができない状況となっていました。

そこで、地域材利用を、循環型社会の構築という環境問題として別の価値観からとらえ、そのことを広くアピールして行こうと、地域の建築士、工務店、製材業者、森林組合職員の有志が集まって

きたのが、当「つなぐ会」です。

当会では、業界内での働きかけを行うよりも、一般消費者の意識を変えることに注目し、地域材利用促進を重点ととらえて活動を行いました。

家づくりに興味のある一般の方向けに、メンバーが講師となり定期的に家づくりのすべての勉強会を実施し、木材だけではなく自然素材の利用を呼びかけました。地域材の利用については、特に地球温暖化を防ぐための二酸化炭素の削減を訴え、ウッドマイルズという考え方を浸透させて、外材や県外からの移入木材と地域材利用の違いを明らかにし、木材価格には現れない価値をアピールしたりしました。

また、公共工事などへの地域材の利用にもコーディネートとして参加し、地元住民と一緒にイベントを実施し、多くの人が地域材を知る機会をつくり、実際に地域材を見てもらうなどしました。さらに、様々なイベントに参加して、地域材を使用した上棟体験や木工教室などを実施し、大人だけではなく子供も対象とした活動を行な

ってきました。

人工乾燥機導入で さらに地域材利用拡大

こうした活動の中で、さらに地域材利用を加速させたのは、メンバーが経営する製材工場が人工乾燥機を導入し、県の認証工場となったことです。

最初は多くの関係者が「おら方の木なんかダメだ」と言っていたが、今では管内の製材工場にスギやカラマツなどの地域材丸太が積まれるようになり、メンバー外の製材工場でも人工乾燥機が導入され、現在では人口9万人ほどの地域に、米村森林組合も含め6基の人工乾燥機が稼働するようになりました。

つなぐ会設立時には、外材建築が当たり前の地域でしたが、住宅や公共建築物への地域材利用が進み、また搬出される木材生産量も大幅に増加しています。現在では森林組合で生産された間伐材が、直江津港から輸出されるようになっています。

高校生を対象に チェーンソー指導・ チェンソーアート、 高性能林業機械操作体験

こうしたことから、当会の活動も現在は木育などを通じた地域材普及活動が主流となっています。最近では小学校での木育活動のほかに、昨年の第45回全国林業後継者大会が地元で開催される関連で、飯山駅の南口

植樹祭への協力、構内に設置した根曲がりスギのベンチづくり、地域材での屋台づくりなどを行っていました。

さて、当会で林野庁補助事業の担い手育成を始めたのは、平成18年からになります。吸収源対策森林施策推進活動緊急支援事業の林



担い手育成事業の取り組み当初は、生徒と炭焼き小屋などをつくった

業後継者育成・確保支援事業として地元の下高井農林高等学校（以下、農林高校）の旧林業科の環境工学コースの生徒を対象として始めました。

始めた頃は、学校の要望もあり生徒とログハウスや炭焼き小屋を建てたりしましたが、その後、伐採実習としてキノコ原木生産を行ったところ、チェーンソーの取り



チェーンソーアートのプロから安全な取り扱い方を習得。
生徒が製作した作品も評判が良かった

扱いが課題であることがわかりました。

そこで平成21年からチェーンソー取り扱いの基礎や伐木造材の基礎を教えることとしました。

チェーンソーアートのプロを講師に招いて実施しましたが、安全な取り扱いを習得することで、チェーンソーへの恐怖心がなくな

り、腰が引けた危険な扱い方が、
研修が終わる頃にはバーの先端付近を使った細かな操作も、簡単にできるようになっていました。

ここで製作した作品は、高校の文化祭に展示され来場者からの評判も大変良かったことから、毎年続けることとなりました。

この他、森林組合の協力により、平成18年から間伐現場で高性能林業機械の操作体験を行っています。

全学年ごとに多様に実施 見学・体験・研修プログラム

当会を始め、地域一丸で後継者育成を続けてきたこともあり、林業事業体等への就職者も増えてきました。一方、農林高校では専門科がグリーンデザイン科となり、

選択コースも再編され、森林活用コースと地域資源活用コースを設けるなど、森林林業へ再び重点を置くようになりました。

こうしたことから、全学年を対象とした活動を考えました。

科を選択する前の1年生には、森林・林業へ関心をもたせるよう、



製材工場を見学し、説明を受ける1年生

森林組合の木
材生産現場や
中間土場、メ
ンバーの製材
工場などの見
学を行うよう
にしました。

そして、2
年生でグリー
ンデザイン科
を選択した生
徒には、地域
の森林・林業
を学ぶため、
直江津港の木
材輸出の現場
や、木質バイ
オマス発電所
北信木材流通
加工センター
の視察研修を

行っています。

森林活用コースを選択した3年生には、実地研修として高性能林業機械研修と伐木造材研修を行いました。今年からは、森林組合の協力により、林業におけるICT活用の先進事例の研修を行いました。

事業の企画、準備に関しては学校のカリキュラムとの調整が最初にあります。毎年行っており、学校側からも期待されていることで



2年生は、直江津港の木材輸出現場などを見学した

すので、1回の打ち合わせで企画はできてしまいます。

その後に、関係者とのスケジュール調整を行い、レンタカーや貸切バスの手配、保険加入、また、森林組合や事業体、県出

先機関などへの協力要請などをして事業を実施します。

当会の宮崎正毅

会長が農林高校の近くで製材工場を

経営している上、

県木材協同組合理事長職にあたり、メンバーに森林組合職員がいたり、事業運営は大変スムーズにできています。

活動前には 必ず安全講習を

この事業を行って一番心配なのは事故です。チェーンソーでも高性能林業機械でも大きな事故につながりますので、一番注意を払っています。活動の前には、必ず安

全講習を行います。過去においては防護衣チャップスをチェーンソーの刃で切ってしまうこともあり、チェーンソーの時は、より注意を払っています。

農林高校とは10年以上のお付き合いとなり、このご縁で飯山市で開催された第45回全国林業後継者大会に出展いただき、大勢の生徒に参加してもらいました。

最近では先生から、生徒たちに小中学生への木育指導の手伝いの機会があれば参加させて欲しいとの要望があり、当会で毎年出展している中野市環境祭でのマイ箸づくりとイスづくりを手伝っていたことができました。当日はテレビ局の取材などもあり、生徒たちも楽しんで子供たちに指導をしていました。

地域貢献という意味でも、来場者からも大変好評でしたので、今後もし生徒たちにこうした機会をつくらせてあげられればと考えています。

活動を時代に合わせて繰り返し広げ、当会メンバーも設立時には40代ばかりでしたが、今は50〜60代。社長などの重要な地位となり、なかなか活動時間をとれなくなっています。しかし、活動を継

続することが、生徒や子供たちなどの次の世代へ、木や林業への想いを引き継ぐことができる唯一の道であると考えています。

生徒たちのための 事業を

最後に、これまで森林組合、協同組合や事業体など林業への就職者を輩出してきたわけですが、景気が好転すると林業は就職先として遠ざけられる傾向にあります。今年は高校生の就職状況も大変良いとのことで避けられることが心配されます。そうした状況でも、林業を目指す生徒が出てくるように、彼らに林業への関心をもたせる事業としていきたい。そのためには教える側の自己満足ではなく、あくまでも生徒たちが満足するよう事業にしたいと思っています。本事業が長く続くこと、そして森林・林業の新しい担い手が力強く育つことを強く願います。

*まとめ

事務局長 田中 忠

事

インターンシップ

例

伝統的な林業地で伐採から製材まで 林業大学生の総合的な研修



ピンホールの解説を聞く学生たち。
材価が大幅に下落するという小さな穴の怖さ。
品質にも関心を持った

加子母優良材生産クラブ「岐阜県」

伝統あるヒノキ生産地で
半世紀以上活躍する
グループ

裏木曾とも呼ばれる加子母地域

は優れたヒノキ生産地としての伝
統があり、江戸時代には徳川尾張
藩の直轄地として、明治時代は皇
室の御料林として、戦後は国有林

として管理されてきた歴史を持ち
ます。伊勢神宮に使用する材を調
達する神宮備林はこの地域にあり、
その材は薄桃色で均一に詰まった
美しい木目が特徴で、東濃松と呼
ばれています。



伊勢神宮式年遷宮斧入れ式での三ツ緒伐り

平成29年はちょうど20年に一度
の式年遷宮斧入れ式の年に当たり、
10月30日に保存会による三ツ緒伐
りが行われました。

加子母優良材生産クラブ（以下、
当クラブ）は、育林技術の向上と
経営の安定化を図り、

林業収入を増大させる
目的のもとに昭和37年
に設立され、それから
途切れることなく活動
を続けてきました。

当クラブのメンバー
は31名、高齢化してい
るものの、親が引退し
たら息子が加入するな
ど、徐々に世代交代も
行われています。

活動内容は時代とと
もに広がり、林業のP
Rや後継者育成を目的
として、企業や都市部
との森づくり事業やイ



ツルの長さと同じ口の高さが同じであることを確認する

政守さんは「育林の中で最も大切なのは選木だと思う」と話し、曲がりがあるから何でも伐るといやり方ではなく、森全体のバランスを考えながら残存木を選び出し印をつけること。そしてその木を育てるためにどの木

午前プログラムは、政守さんの家の所有林で間伐の選木と伐採の技術指導です。

育林の中で最も大切な選木

11月30日、岐阜県立森林文化アカデミーの学生22名を対象にイン

ベントへの参加、そしてインターンシップや研修会など年間を通して活発です。

粥川永温ひさよし会長は「斧入れ式の式典に出席し、改めて林業地の伝統を後世に引き継ぐ責任を感じた」と話しています。

今回の講師を務めた安江政守さんは森林文化アカデミーのOBで27歳。卒業後、三重県の速水林業で6年間働き、別の事業体で1年架線現場の仕事をした後、地元に戻り、父の後を継ぐ形で昨年当クラブに入会しました。

事務局は安江正秀さん40歳。正秀さんも森林文化アカデミーの前身の県立林業短大の出身で、森林組合を経て山仕事請負業として独立し、当クラブ若手メンバーの中心的存在です。



学生代表による伐倒。初めに政守さんと伐倒方向を確認する

を倒せばよいか選ぶようにすると説明しました。

次に実際に伐倒してみせ、その切り株を見ながら、ツルの長さと追い口の高さが同じになるようにと説明しました。

その後、学生の代表が緊張しながら倒します。説明を頭で解つても、その通りに手が動くまでには

は「丁寧に枝打ちして育てられた木を伐らせてもらい、貴重な体験でした」と感想を寄せていました。

粥川会長は「政守くんは高い技術があるし、言葉も明快やから学生たちは引き込まれとった。学校とはまた違った勉強になったんだと違うかな」と話していました。

最後に政守さんは学生たちに林

訓練が必要で
す。時間をかけ正確に伐倒し終えた学生は「この体験は自信につながりました」と充実した様子で振り返っていました。

また、造材は、加子母では木口に枝打ち断面を出し、市場で優良な枝打ち材であることを示すことを教わりました。

学生の1人



加子母では丸太を市場に出すとき、枝打ち跡が買い手に見えるように造材する



学生の作った受け口。いったん手を止めて政守さんが解説し、みんなで確認

製材所で 学んだこと

兄のような年齢の政守さんの言葉は、学生たちの心に真つすぐに届いたようでした。

午後は地元の田口林産に移動し製材の勉強をしました。

午前に伐採したヒノキの一番玉と二番玉を、昼食の時間に粥川会長と正秀さんが運び込

業について自分の思いを率直に語りました。「祖父が本格的に始めた林業を父が継ぎ、この山にはたくさんの足跡が残っている。僕も次の世代にいい山だと思ってもらえるよう毎日頑張っているつもりです」。



田口林産で製材の見学。午前に伐ったヒノキ一番玉。自分たちが伐っただけあって関心をもって見入る

んでおきました。その製材の見学なので関心が引きつけられます。「東濃松は製材二度挽きが基本で、厚めに製材し、乾燥させた後に再度製材して出荷します」と田口さんから説明を受けました。

そして田口さんが事前に購入してあった別の枝打ち材の製材を見学したとき、ピンホール（注・つまようじほどの小さな穴）が現れました。「7000円ほどで出荷できるものが1700円に下がっ

てしまい大赤字です」。それを聞いた学生たちからはため息がもれました。

学生たちはこのインターンシップを通じ、山で育てた木を出し、製材して売るまでを流れて学びました。以下、学生たちの声です。「将来は自伐林家としてやっていきたいと考えているが、経営の勉強になった」

「価値を生み出す物の見方があることを勉強した」「祖父の育てた山を引き継いで、生き生き働く政守さんの姿に感動した」「技術と知識を身につけて、いつか自分の山を手に入れたい」。

粥川会長はじめメンバーは、学生たちの前向きな受け止めに充実感を味わい疲れも吹き飛びました。来年度も頑張って取り組みたいと考えています。

ヒノキの ピンホール問題

ところで、当クラブでいま一番の関心事は「ヒノキのピンホール問題」です。ここ数年、製材した材につまようじほどの小さな穴が見つかるとなりました。加子母材の多くは四面無節の柱材で、製材で出る端材（ノタ）まで造作材として取り引きされる高級材で



四方無節の柱の美しさに感動し、枝打ちの大切さを学ぶ学生たち

の木はピンホールが出るようだと、少しづつ解明されていますが、まだ伐採するまでわからない状況です。当クラブでもメンバーが顔を合わせると挨拶代わりのようにピンホールの話題が出てるので、一刻も早く今後の対策につなげるべく、製材所や森林組合と共同で勉強会や情報交換を行うなど、地域を上げて取り組んでいます。

す。強度的には問題はないものの、ピンホールが見つかる材は10分の1程度にまで下がり、大きな打撃です。

強度の枝打ちをした木に発生が目立つことから、原因は樹勢が弱ったときにハンノキキクイムシが侵入したのだろうと考えられています。木口の年輪に、にじんだシミのようなものがあつたらそ

地元の子どもに 伝統を伝え続ける

当クラブでは十数年間、地元の加子母中学生を対象に神宮備林の見学会を行ってきましたが、予算等の関係で中止せざるを得ない状況でした。しかし、学校が費用負担するのでぜひやって欲しいと強い要望があり、実施することになりました。

10月25日、加子母中学1年生32名が参加。森林インストラクター



見学会に参加する加子母中学1年生

であるメンバーの案内で、森林管理署の許可を取って国有林のゲートを通り、式年遷宮の儀式が行われた跡地を見学し、自分たちの地域の林業の歴史的背景を学ぶとともに、豊かな森林資源や植生に触れました。午後は40分ほど歩いて二代目大ヒノキを見学する予定でしたが、小雨まじりの天候で大変寒く、残念ながら今回は中止になりました。

この国有林地帯は、地元で暮らす人でもなかなか入ることのない場所なので、この機会に中学生が観て知っておくことは地域の伝統を学ぶ上でも大切なことだと思っています。当クラブでも続けられる限り大切に取り組みたいと考えています。

＊まとめ 編集部

事

インターンシップ

例

チェーンソー伐倒や高性能林業機械作業 高校生の林業研修を指導



チェーンソーでの伐倒を指導する國武会長

上益城地区林業研究グループ 連絡協議会「熊本県」

幅広い年代が活躍する
林研グループ

上益城地域は、西は県下最大消

費地の熊本市圏、東は宮崎県に

隣接し、県境には九州中央山地の

一角をなす国見岳や向坂山など

1500mを超える秀峰があり、

また、江戸時代の1854年に水

路橋として建設され、国重要文化

財となっている通潤橋や同時期に

始められた人形浄瑠璃の清和文楽

など自然や歴史文化豊かな変化に

富んだ農林業地帯です。特に緑川

流域の御船町や山都町は、県内でも

有数の良質・良材の産地として

古くから林業が盛んな地域でした。

上益城地区林業研究グループ

(以下、上益城林研)は、御船町・

山都町の林業者を中心とする御船

町林業研究グループのメンバー17

名で構成されています。農林家や

会社員など20代から70代までの幅

広い職種や年代のメンバーたちで

す。山仕事に従事するものや、週

末などに所有山林で山仕事をこな

しているの、チェーンソー操作

にも熟練した実践派がそろってい

ます。彼らが、地元の熊本県立矢

部高等学校(以下、矢部高校)で

林業研修を行うようになって、

11

年目になります。

林業系学科生徒に

林業現場を知ってほしい

矢部高校は林業系学科(平成22

年から緑科学科)を有し、地域の

林業者育成に長く貢献してきました。

上益城林研メンバーのなかに

卒業生も少なくありません。しか

し、上益城林研が研修を始めた当

時は「矢部高校生は、チェーンソ

ーを持ったことがないし、林業現

場に行ったこともない」状況でし

た。それを聞いて、「そりゃ、い

かんとじゃないか(良くないので

はないか)とメンバーの中で話題

になった」と、藤本輝美前会長は

語ります。加えて、学校の広大な

演習林は、手入れが行き届いてい

ない状況にありました。

そこで、上益城林研指導のもと、

矢部高校生を対象に、演習林での

林業研修を始めました。

今年は、11月17日に2年生8名が間伐体験と路網整備実習を行い、11月21日には1年生4名が高性能林業機械操作研修を受講しました。いずれも緑科学科の生徒ですが、近年、定員40名の緑科学科は入学者が減り続け、10名を切るようになっています。「地域の少子化は進んでいるし、林業の担い手も減り続けている」と、上益城林研メンバーは危機感を強くもって研修に臨んでいます。

2年生は間伐とバックホーの操作を体験

2年生が行った研修は、2班編成とし、①チェーンソーでの伐倒、採材、玉切り、②トビでの木寄せ、林内作業車のウインチでの集材・運材、③バックホーの操作です。この3つの作業をローテーションで体験してもらいました。その内容と生徒の声は以下のとおりです。

①チェーンソーの操作

チェーンソーでの伐倒は、本年8月から会長を務める20代の國武智仁新会長がまず倒す方向をピンポイントで示し、一連の流れを実演したのち、水平にチェーンソー



林内作業車の操作で生徒たちは、トビを使う難しさも体験した



2年生は、路網整備実習で、バックホーの操作指導を受けた

を持つための姿勢や退避場所の確保など、細かい指導を行っていました。

また、玉切りでは、キックバックが発生しやすい状況の説明や上

から回し伐るのか、下から回し伐るのかを考えさせ、実際にチェーンソーが丸太の自重で挟まり抜けることを体験させながら研修を進めました。

さらに、チェーンソーの豆知識として国産チェーンソーの一部は、オイル、燃料のキャップを外す工具としてスロットルレバーを用いるよう設計されていることも教える

ました。

② 林内作業車の操作

トビの使い方やワイヤーの荷掛け、ウインチ操作を体験させました。ワイヤーの内角に入らないこ

とや、荷掛け手とウインチ操作をする人が連携するためには、身振りを使い、しっかりと合図を送ることなどを徹底して教えました。

わざと作業車を路肩斜面に置いて



フォワーダのグラップルを使い、材の積み降ろし操作を行ったが、高い位置での作業に「怖かった」という感想も聞かれた

て、無理な引っ張り方をして車体

が傾く様子を見せた上で、材を引く方向と車体の向きに注意することも教えています。

③ バックホーの操作

法面の掘削や穴を掘ったりならしたり、伐根の掘り取りなどの操作体験を行いました。生徒たちは、微妙なレバー操作に戸惑い、掘削の際に「車体が浮くのが怖かった」と感じたようです。

1年生には 林業機械体験を 通じて林業の 関心を広げる

1年生の研修では、林内作業車や高性能林業機械がどのような働きをするのか興味をもたせ、林業への関心につなげるための第一歩として機械操作を企画しました。内容は、①プロセッサでの造材、②フォワーダの走行とグラップ

ルでの荷積み、荷降ろし、③林内作業車の操作体験です。

プロセッサとフォワーダは地元森林組合の機械を借り、指導もオペレーターの方にお願いました。

また、学校林を使った研修では前週に2年生が伐採・玉伐りした木のほか、メンバーが研修用に伐採した間伐木を利用しました。以下、生徒たちの様子です。



1年生は、プロセッサでの枝払いから造材までの実習を行った

④プロセッサでの造材

体験したメニューは、枝払いと玉切り作業で、参加者が減ったことで、1人当たりの操作時間が1時間程度となり、終わるころには操作にも少し慣れて興味をもつ生徒もいました。

⑤フォワーダのグラップル体験

高い位置に上っての操作に「怖かった」という生徒らしい意見もありました。

⑥林内作業車の研修

トビを初めて見る生徒もいて、その扱い方の難しさや、人力で動かす丸太の重さを感じたようです。

実践者の言葉で 安全意識を伝える

生徒たちは、チェーンソーを使う際は、学校の備品のチャプス、防振手袋を着用していましたが、「命を守るために重要なことを説明するので、説明中は必ずエンジンを停止して聴くこと」や「気を抜くと、ちょっとしたことが大ケガにつながることを説明しました。

生徒のなかには「林業をやる」と言う子もいて、その言葉に、メンバーは疲れも吹き飛ばす思いでし

た。

「林研メンバーはみんな、山の仕事に誇りや自信を持っているから、それを伝えたいし、山に関心を持つてもらいたいという気持ちで、脈々と持ち続けているんです」と國武会長。さらに、「広葉樹や竹の伐採はやり方がまた違うからな」と、来年度以降も、高校生たちに教えたいことがまだまだあるようです。

熊本地震からの 復興に向けて 自分たちにできることを！

「熊本地震による被災家屋の解体が進み、地域の彩りが失われている」と感じ、自分たちも地域のために何か協力したいと考えた御船町林業研究グループの岩永誠哉会長が、4月中旬に「杉のこいのぼり竿」、「こいのぼり」、「がんばろう熊本のぼり旗」を20セット用意し、被災地域の仮設団地等公共性のある場所で設置を希望する団体等に、先着順で無料配布する活動を実施しました。

近年、20代の若手会員も新たに加わり、次世代に活動が引き継が



御船町林業研究グループが無料配布し仮設団地に設置されたこいのぼり

れました。仲間同士のつながりのなかで学び合い、活動を高め合う活発な林研活動が、これからも様々な形で地域林業に活力を与えてくれそうです。

なお、最後になりましたが、上益城地域を震源とする平成28年度熊本地震では、自宅や農地等が被害を受けたメンバーもあり、全国林業研究グループ連絡協議会を通じて全国の会員メンバーの方々が

らあたにかいご支援をいただきました。この場をおかりしてお礼申し上げます。

*まとめ

熊本県県央広域本部
上益城地域振興局 林務課
藤村栄春

事

森林・林業体験学習／インターンシップ

例

林業を伝える活動 親子参加型教室から高性能機械研修まで



ネイチャーゲームで盛り上がる子供たち

大田原市林業振興会「栃木県」

野州材・八溝材で有名な
林業地域が林研の母体

大田原市は、栃木県の北東部に

位置し、西に日光連山、北に那須

連山、東は八溝山系を抱える地域

です。総面積は3万5412ha、

森林面積は1万5293ha、民有

林の人工林は9393haで人工林率は約76%と、栃木県平均の約56%を大きく上回っています。また、大田原市は平成17年10月に1市1町1村が合併してできた広大な土地を有する田園工業都市で、合併した市町村の1つである旧黒羽町は、林業の盛んな町です。

旧黒羽町の林業の歴史は古く、1764年に黒羽藩9代藩主となった大関増輔の時代に積極的に林業が進められ、那珂川の水運を使って江戸へと輸送された大木は商品価値が高く（当時は野州材と言われていた）、黒羽地方の林業を支えました。現在でも、黒羽町で生産される木材は「八溝材」と呼ばれ、栃木県のブランド材の1つとなっています。大田原市林業振興会（以下、振興会）メンバーのほとんどがこの旧黒羽町出身であり、昭和54年に発足した黒羽町林業振興会が母体となっています。

17年目を迎える 好評の親子参加型森林教室

振興会で森林教室を始めたのは、今から17年前です。都市部に住み山になじみがない子供たちにもっと森林の楽しさや大切さを知ってもらい、林業への理解を深めてもらうきっかけになってほしいという思いからでした。

森林教室の内容は、現在では森林の大切さや働きを学ぶ講習、森林の中で楽しみながら行うネイチャーゲーム（樹種クイズ、木の実クイズ等）、おびくズをつるや松ぼっくりを使つてのクリスマスリース作りなどです。

毎年1〜2校の小学生約50名を対象に実施しており、保護者や先生も参加することから今までに29校延べ約1500名の方が参加しています。

研修の時期は例年12月の初旬と

いうこともあって、クリスマスのリース作りは毎年大変人気です。取り組みの時間は約1時間30分ほどですが、多くの子供たちがさらにきれいなものを作ろうと頑張る、予定時間を過ぎてしまいます。中には、保護者の方が熱心な親子も

いて、例年この研修は大変な盛り上がりを見せます。以前は、なだらかな斜面に落ち葉を敷き詰め、ダンボール紙をそのように使い斜面を滑り落ちる遊びも実施していましたが、原発事故の影響で落ち葉は危険ではな

いかとの意見が出て中止することになりました。昼食は振興会の婦人部が中心となり作るカレーが定番となっており、毎年おかわりをする子供たちが続出、あつという間になくなってしまいます。やはり、外でみんな

めが大変だけど、ネイチャーゲームで森林の中を歩き回り、リース作りや昼食に遊ぶ子供たちの姿を見るのが楽しみでこの行事に参加している」と言っています。この森林教室は参加者にもメンバーにも大変好評な活動です。



樹種や木の実のクイズなどで、森林を知るネイチャーゲーム。子供も保護者も楽しむ



クリスマスリースづくりの様子

なと一緒に食べると一段とおいしく感じようです。研修の最後には、それぞれが作ったクリスマスリースを持って集合写真を撮りますが、皆個性あふれる作品ばかりで本当に感心します。

実施している振興会のメンバーは、「毎年約50人分のつるや松ぼっくりなど、リースの材料集

新たに実施 高性能林業機械研修

昨年度から、地元の農業系の高

校生を対象として
高性能林業機械運
転研修を始めまし
た。機械の種類は、
プロセッサ、グラ
ップル付きフォワ
ーダ、グラップル
付きバックホーの
3種類です。



それぞれの個性あふれるクリスマスリース作品を持って記念撮影

振興会メンバーに森林組合の作業員をしている方がいるため、地元の森林組合に協力してもらい機械を借り受け、メンバーの所有する森林を研修現場にして、実際に高性能林業機械の運転操作を体験してもらうという内容です。

目的は、次代の林業を担う人材の育成・確保です。

の研修の実施を決めました。

地元にある農業系の高校に、この研修の話をしたところ、実際の林業の現場を肌で感じる良い機会なのでぜひ参加したいということ

で快諾してくれました。生徒から参加者を募ったところ、10名の申込みがあり、そのうち4名は女子生徒でした。今さらながら、女性の積極的な姿勢には驚きました。



林業機械運転体験の前にしっかり説明を受ける生徒たち。
女子生徒も積極的に参加



現場に到着し、いよいよ体験開始

当日は、振興会メンバーの中で林業機械を所有している方や森林組合の職員が指導者となり、高校生に3種類の林業機械を実際に体験してもらいました。やはりプロセッサは作業が複雑なせいか、操作に苦労する生徒が多かったようです。

人数が少ないことから、1人に多くの時間を当てることができたが、熱心に取り組む生徒が多く、予定していた時間を過ぎてしまふほどでした。また、教えるほうも相手が将来、林業に携わるかもしれない地元の高校生というこ

とで、今までとは違ったやりがいを感じたようです。帰りのマイクロバスの中で高校生に感想を聞きましたが、林業の現場で、土木作業の現場で動いているような機械が使われていることに驚いた生徒がたくさん

いました。農業や土木作業は目に触れる機会がありますが、林業は山の中で行われているため、実際に行われている現場を見る機会がほとんどないことからのようです。実際の林業の一端を知ってもらえただけでも、この研修を開催した意義があると感じました。



指導者の教えを熱心に聞きながらフォワーダの操作体験

これからも続けていく

発足した当時の振興会は、間伐や枝打ちの講習会、保育コンクールの実施など、メンバーそれぞれを対象とした活動がメインでしたが、今では、地元の小学生や高校生を対象とした活動や地元のお祭りへの参加など、より地域に密着した、地域の人たちに喜ばれる活動が大きな割合を占めるようになってきたように感じます。

これからも、その時代とともに活動内容が変わっていくこともあると思います。メンバーの高齢化が進んでおり、この先はメンバー数が大幅に増えていくことは難しいかもしれません。

しかし、森林・林業のために多くの人たちに必要と思われるような活動を引き続き実施していきたいと思っています。

*まとめ

大田原市林業振興会事務局

事

森林・林業体験学習

例

中学校と連携で20年継続 生徒への間伐体験支援



間伐体験でロープと滑車の設置方法を見守る生徒たち

額田^{ぬかた}林業クラブ「愛知県」

額田^{ぬかた}林業クラブについて

額田^{ぬかた}林業クラブ（以下、林業ク

ラブ）は、愛知県のほぼ中央、岡

崎市の東側に位置する額田地域
（旧額田町）を中心に活動する林
業研究グループです。

岡崎市の森林面積は約2万30

00 ha、森林率は約60%、人工林率は約59%と高く、そのほとんどは額田地域にあり、岡崎市の重要な水源地域になっています。

林業クラブは、額田地域の各所にあつた3つの林業研究会を統合し、昭和51年に現在の形で設立されました。

メンバーは61名（男性51名、女性10名）で平均年齢は72歳です（平成29年度現在）。これまでに、
・ヒノキの優良材を生産し、1 ha 当たり1億円の売り上げを目指す1億円林業の推進
・海布丸太の生産

などの取り組みを進めてきました。現在は、

・県内小中学校生徒を対象とした間伐体験
・女性部による「つまもの」の生産

・地域材を利用した建築を推進するための、林業クラブメンバー

による主に柱材の供給

・額田木の駅プロジェクト

・地元の催しでの優良柱材の展示・枝ペン作りを通じた木育活動

など、多様な取り組みを行っています。

これらの精力的な活動は高く評価され、全国林業グループコンクールでは農林水産大臣賞と林野庁長官賞をそれぞれ2度受賞するほど、全国に認められる林業研究グループとなりました。

地元中学校への間伐体験

様々な活動の中で林業クラブが特に力を入れているのは、間伐体験のサポートです。県内各地域の小中学校から依頼を受けて実施していますが、額田地域の地元中学校の生徒に対しては毎年欠かさず実施しています。メンバーには「地元の子供たちに森林のことを知ってもらいたい」という強い思いがあるからです。

森林が多い額田地域においても、地元の子供たちが山へ入ることは少なく、森林や林業の現状につい

て知る機会は減りつつあります。そのため地元の子供たちは森林に対する興味をもちにくくなっています。

子供たちに森林・林業に興味をもってもらい、「森林の大切さや間伐の必要性についてもっと学んでほしい！」という思いから、この間伐体験を行っています。活動は平成9年から毎年欠かさず続けており、本年度で20年目を迎えました。今では中学校の1年生全員が参加する学校の恒例行事となっています。

20年間、間伐体験を続けることができたのは、林業クラブと中学校との良好な関係性にあります。中学校は地場産業である森林・林業のことを学ぶ機会を得られ、林業クラブは自分たちの取り組みを子供たちに教えることで、自分たちの励みにもなっています。お互いが必要とし、必要とされる関係性が、この体験を続けることができた大きな理由となっているのです。

事前学習で基礎知識を習得

間伐体験は、生徒たちへの事前



「なぜ間伐が必要なのか？」体験の前にしっかり基礎学習

学習と、その後の実践の2本立てで行います。

今年（平成29年）は、中学校とスケジュールを調整し、事前学習を6月15日に行いました。

メンバーと県林業普及指導員が協力し、林業の現状を説明します。生徒たちは説明の中で、人が植えた森林は手入れが必要であることや、手入れの1つである間伐は木が成長し混み合ってきた時に間引きを行うことであり、間伐を行うことで、森林が持つ機能の低下を防ぐことなどを学びます。

このように、森林・林業に関する基礎知識を事前に学んだ上で、

間伐体験（実践）に臨みます。

安全に注意して間伐体験を行う

間伐体験（実践）は7月13日に行いました。場所は地元財産区の森林（ヒノキ林）です。

当日は安全に作業を行うことに重点を置きます。これは林業クラブが特に気をつけていることの1つです。

生徒たち自身が手ノコを使って

木を伐るため、服装は長袖・長ズボン・軍手・ヘルメットの着用を徹底させます。

今年度は60名の生徒が参加したため、1班当たり10名の6班に分け、各班にメンバー1名を付けました。

安全性を高めるために、補助者として県の林業普及指導員や市の職員も各班に付きます。林業クラブの荻野金嗣会長も生徒の様子を見守りつつ体験地全体を見回り、さらなる安全確保に努めます。

また、体験場所は事前に準備しており、各班の伐った木が接近しないように班と班の間隔を十分に取るように注意しています。

当日の全体説明では間伐の意義を改めて説明し、その上で受け口・追い口の作り方とその理由など、大きな木をいかに安全に伐倒するかについて説明します。生徒たちは真剣な表情で説明を聞いていまし



模型を使った受け口・追い口のしくみの説明を受ける生徒たち

た。

手ノコ、ロープを使って

間伐は手ノコとロープ・滑車を使い、メンバーの指導を受けながら、生徒たちが自分で行います。

まずメンバーが伐倒方向について生徒に説明します。「この方向に倒すと、別の木に当たる」、「この方向に倒すと枝が強く引っかかって倒れなくなる」など、なぜこの方向に倒すのかを生徒に教えます。

次に、伐る木の倒れる方向を誘導するために伐倒する木にロープを巻いておきます。滑車を使ってロープの方向転換を行い、引っ張っている人の方向に木が倒れて来ないよう、安全に引っ張れるようにします。

続いて生徒が手ノコで受け口を作り、追い口を入れます。

メンバーは手ノコの使い方から指導します。まず、手ノコは引くとき力を入れると切れ



間伐体験スタート！

るといふ基本的なことから説明し、受け口を作る時の切り込みの深さや角度、追い口を入れる時の受け口からの高さや手ノコを入れる深さ、つるの残し方などを丁寧に説明します。

生徒は交代しながら手ノコで木を切りますが、うまくいかない時は、メンバーが手助けします。初めて木を切る生徒も多く、初めは手間取ることも多かったですが、だんだん要領を得て上手になっていきます。

追い口を入れるタイミングで、ロープを引っ張る準備に入ります。



タイミングを合わせながらロープを引っ張る生徒たち

生徒1人がメンバーの指導を受けながら最後の追い口切りを行い、いよいよ木が倒れる状態になると、残りの生徒と補助者が追い口の仕上げに合わせてロープを引っ張り上げます。生徒たちは「セーの！」と大きな声を上げ、皆でタイミングを合わせながらロープを引っ張り上げます。

伐った木が地面に倒れて大きな

音が響いた時は、生徒は歓声をあげて喜んでいました。混み合っていた林冠に青空がのぞき、暗かった林内に太陽の光が差し込みました。ヒノキのいい香りが漂います。その後、伐った木の枝払いや玉切りを行います。

間伐した木でベンチ加工

例年、伐った材を使ってベンチ

を作ります。まず林内から運び出すために1・5 m間隔で玉切りします。これも生徒が手ノコを使っています。行きます。全ての丸太を生徒だけでは玉切りできないので、メンバーがチェーンソーを使って手助けしますが、手ノコの場合と比べてスピードがあまりに違うので、生徒は驚いていました。

最後に玉切りし

た造材木の搬出を行います。造材木1本を生徒が数人がかりで持つて歩き、林内から道際まで運び出します。重い材を手で運ぶのはきつい作業で、生徒は励まし合いながら材を運んでいました。道際まで運んだ後は、その場で皮を剥ぎます。くすんだ色の皮を剥いだ後、ヒノキの綺麗な白い木肌が現れると、その変貌に生徒は非常に驚いていま

した。

体験終了後は全体で終わりの会を行います。

生徒が体験の感想を話し、メンバーへのお礼を述べ、間伐体験は終了となりました。

この間伐体験では、ベンチの材料約60玉を造材することができました。丸太は製材所で板材に加工

してもらい、その後、生徒がベンチに仕上げます。

これまで市内の小中学校や公共施設などに寄贈されており、今年は新東名高速道路の岡崎サービスエリアに寄贈されます。

生徒からの様々な感想

生徒からは、「木を初めて伐つ

た」、「手間取った。

大変だった」、「(追

い口を) 入れた後

はもつと簡単に倒

れると思ったが、

ロープを数人がか

りで引っ張らない

と倒れなかった」、

「事前に見た写真

では、材を簡単そ

うに運んでいるよ

うに見えたが、実

際は足下が濡れて

いるなどして、大

変だった」、「木に

ロープをかける場

所が悪く、1本伐

倒を失敗した。細

かな所まで注意が

いる作業だとわか

った」など、感想が出ました。貴重な体験ができたことを喜び、実際に作業しないとわからない様なことを学んだようです。

今後も間伐体験を続けていく

中学校の卒業生の中には、この

間伐体験をきっかけに将来、森林・

林業に携わる仕事に就きたいと、

農林高校へ進学した生徒もいます。

現在、林業クラブでは、メンバ

ーの高齢化などによりこれまで

と同等の活動が難しくなるなど、

様々な課題が発生しています。

しかし、この間伐体験が地元の

子供たちにとって森林・林業につ

いて学べる貴重な機会になっ

ているため、生徒たちの喜びの顔を原

動力に、続けていきたいと考えて

います。

これからも林業クラブの間伐体験により、森林・林業に興味をもつ生徒が増えることを期待します。

*まとめ

西三河農林水産事務所 林務課
林業普及指導員 小林健之



ベンチ用の玉切りが終わり、これから搬出開始

事

森林・林業体験学習、女性への林業就業の働きかけ

例

復興・発展に向け子供と女性に笑顔を！ 木に触れる、木工体験



子供たちに人気の木工体験

田人林業研究会「福島県」 たぴと

設立40周年を迎えた
林研グループ

いわき市の南西に位置する田人^{たぴと}

地区は森林面積が約9割という県内でも林業の盛んな地域です。田人林業研究会（豊田新一会長、以下、田人林研）は、田人地区で林

業や農業を生業としている30～76歳までの男性メンバー15名で活動しています。

林研活動は昨年で40周年を迎えました。会の記念誌として作成した「40年の歩み」からも、当初から続けている磨き丸太等の生産加工販売や吸収源対策森林施業推進活動緊急支援事業、高校生等に対する林業経営・就業体験等事業、小中学生を対象にした森林・

林業体験学習など、これまでメンバーが精力的に取り組んできた活動記録の数々を見ることが出来ます。

6年前に発生した東日本大震災により、福島県は甚大な被害や影響を受けました。今もなお、その傷が癒えたとは言えませんが、少しずつ復興への歩みを進めてきました。

同記念誌には、要となる一次産業としての林業の復興・

発展とともに、明るく元気ないわき市の創造を目指し取り組むために、今後も田人林研の支援と協力を願いたいと、清水敏男いわき市長からの期待の言葉も寄せられています。

「たぴとほっこり祭」で 子供の木工体験

「たぴとほっこり祭^{さい}」は、平成



木工体験ブースのメンバーたち



子供たちの貼り絵と貯金箱の作品



「お気に入りの作品ができたよ！」

20年から開催されている田人地区の祭りです。田人産新鮮野菜やこんにやくの直売、バス周遊ツアーやライブステージ、地区対抗丸太切り大会など盛りだくさんのイベントが催され、毎年地区内外から訪れる多くの人で賑わいます。

「たびと復興祭」

の名も持ち、地区住民が誇りをもつて更なるやる気を取り戻し、がんばろうという願いが込められています。

今年は11月25・

26日(土・日)の

2日間、晴天に恵

まれた中で行われ

ました。田人林研

は、この祭りの26

日に木工体験を開

催。用意したのは、

15×13cm四方の板



メンバーにアドバイスを受けながら木の家の貯金箱を作成中

女性には 鍋敷き作り

女性にも身近なところから木に触れてもらい、木を使う、森林・

林業を知ってもらうきっかけにな

ればと、鍋敷き作りを開催しまし

た。幅18cmほどのスギ板材に好き

な形を描いてもらい、メンバーが

屋根に煙突をつけたり、自分の名前を書いたりとアレンジして組み立てます。貯金箱は人気で、用意した40個はすべて子供たちのオリジナル作品に変身しました。

メンバーは、子供たちが真剣な表情で取り組む様子を見守りながら、アドバイスをしたり、求めに応じて穴を開けたり切り取ったりするなどフォローしていました。



完成した鍋敷きを持って笑顔の女性たち

き色をつけます。

福島県林研グループ連絡協議会（以下、県林研）会長でもある豊田会長の呼びかけで、この活動に同副会長の早矢仕恵子さんが応援に来てくれました。早矢仕さんは福島県双葉郡内の女性たちで活動する県内唯一の女性林研グループ「ふたばグリーンレディースネットワーク2000」の代表を務めていましたが、震災の影響で、活動のめどが立っていない状況です。早矢仕さんの「作ってみません

か？」という声かけに、いざえんぴつを持った年輩の女性たちは「久しぶりだわ。描けるかしら？」と最初は躊躇気味でしたが、出来上がった作品に満足の様子。木目の素朴な味わいに「これからも木で何か作ってみたい」と話していました。

お子さんを連れのお母さんや若い女性たちの参加も多く、ハート型にしたり、イニシャルを入れてみたりと、それぞれの感性が出ています。「これから鍋の季節、食

卓で手づくりの鍋敷きを使ってくださいね」との早矢仕さんの言葉に、女性たちは笑顔で持ち帰っていきました。

これらの木工体験は、同11月にほつこり祭より一足早く行われた「おふくろの宿」という施設での祭りでも開催しており、こちらも好評でした。

また、木工体験をした子供たちの保護者や女性たちに、自由に使うてくदाさいと、取り組みの準備などで出た端材を提供しました。普段はあまり触れる機会がないかもしれないが、手に取り「これは使えそう」と持ち帰る人も少なくありませんでした。端材も有効に利用したい、利用してもらえれば、そんな思いも大事にしています。



子供も女性も集中。丸太輪切り体験

一緒に活動している田人林研三代目の会長で現在は県林研の顧問も務める蛭田一さんは、丸太の輪切りを指さしながら、「田人の材はね、心材の赤身具合がきれいなのが特長だよ」と誇らしげに話していました。

地域に根ざした活動で 田人地区に元気と笑顔を

そのほかにも大人も子供も挑戦できる丸太輪切り体験の場も設置。メンバーにとつては孫のような子供たちに鋸の使い方を教えていました。

また、ほっこり祭の人気イベントでもある地区対抗丸太切り大会への準備も毎年田人林研が担当しています。田人内8地区が競うので手頃な同じサイズのスギ丸太がずらり8本。今年も多いに盛り上がっていました。

ほっこり祭が終わると、今度はその日にメンバーらがジャンボクリスマスツリーを区内に設置。形の良いモミの木選びからライトアップの飾り付けまでチームワーク良く進めます。クレーンに乗りライト設置を担当した若手メンバーが、ほっと一息ついていました。大晦日が近づく頃にはスギ丸太で作った門松の設置も予定しているとのこと。地域の年中行事にも田人林研による木のもてなしが光ります。

田人林研にとってほっこり祭や



ほっこり祭とクリスマスツリーの設置を終えたメンバーたち。
みんな今年も無事にやった！という表情

地域への活動は、多くの人に田人の木を身近に感じてもらい、森林・林業普及へ繋げていければということはもちろんですが、この地区の活性化を図り、さらには子供や女性が元気になり、笑顔を取り戻してもらいたいという震災からの復興・再生に向けた思いも込められているのです。

子供たちのために 林業地域ができること

「いま、木でないと、山でないと、山村でないと、できないもの。

そういうもんを考えていかなければ」と豊田会長は話します。「自分たちが子供の頃は、野鳥をワナで捕って遊んでいました。食べるのはかわいそうだけど、生きものの命をもらうことで、人は生きていく、という現実感を学べたと思います」。子供たちのために何ができるだろう。豊田会長の模索は続きます。

森林・林業の再生と 復興のために

また、いわき市や南相馬市など

を中心に小中高生を対象にした森林教室や木工体験教室も活発に行っています。木工体験では折りたたみ椅子や木のボールペン作りなど、状況に応じた内容で取り組んでいるのも田人林研ならではと言えます。

メンバーの大半は60代以上になり、田人林研も後継者へ繋げていくことなど課題はありますが、豊田会長は「メ

ンバーみんなはもちろん、これからは若者も女性もみんなで活動していくことが大事じゃないかな」。来年の6月には全国植樹祭（於…南相馬市）の関連行事として、いわき市で全国林業後継者大会を開催します。いまとこれからを見据えつつ、活動を進める田人林研です。

＊まとめ 編集部

事

女性林業者への安全研修会

例

チェーンソー、刈払機安全講習から 山菜加工・販売まで



参加メンバーたち

穴水町林業研究会女性部「石川県」

山と海、恵まれた地域で
活発に活動

石川県能登半島の中央に位置す

る穴水町。南部は七尾北湾の静かなリアス式海岸、北部と西部には能登丘陵があり、海と山両方の幸に恵まれ農林水産業を主な産業と

しています。穴水町林業研究会女性部（以下、当会）は、昭和58年の第34回全国植樹祭をきっかけに設立、40年近くこの自然豊かな町で活動してきました。

坂本ちづる会長は、当時幼い2人の子供をベビーカーに乗せ設立に奔走し、今では孫がそのときの子供と同じ年齢になっていますが、持ち前の面倒見の良さで会を牽引し続けています。3名だったメンバーは27名になり、活動は活発です。定年退職を機に入会したメンバーは「楽しくて退屈する日は1日もないわ」といい、「生き生きやってるから家族が協力してくれるようになった」と話しています。

小型チェーンソー、 刈払機の安全講習会

11月23日、メンバーを対象にした小型チェーンソーと刈払機の扱い方の安全講習会を開催し、18名

が参加しました。

安全講習会は平成27年から始まり今年度で3回目。石川県林業研究グループが主催している伐木競技の応援に毎年駆けつけているので、女性部でも関心が高まっていました。

地元の林業機材販売店・新栄商事二代目社長の吉田光宏さんを講師に、穴水町林業研究会の男性メンバーらがサポート役として解説の補足や悪いお手本を見せるなど、笑いを盛り込んでくれました。

午前はメンバーが所有する志賀町三明の40〜50年生のスギ林で実技を開始。

最初にチェーンソーの扱いを習い、キックバックなど危険に対する諸注意を受けた後、順番に伐倒しました。メンバーが作った受け口を吉田講師が解説し、近寄ってみんなで確認したあと、つるを残すことを意識しながら追い口を入

れ伐倒しました。
「チェーンソーは重く、腰を入れて踏ん張らないと体ごと取られそうな気がして難しかった」、「思い通りの位置に倒れたときは気持ち良かった」などの声がありました。

次に刈払機の実習を行い、正しいエンジンのかけ方や使い方を習いました。キックバックを起こさないよう刃の左上に当て、振り幅



さあ、安全講習会開始！

用している人は多くいましたが、冬場に長期使用しないときは燃料を抜き、ホコリを防ぐためビニールを掛けるなど手入れが自分でできるようになり、安全に大切に管理できるようになりました。

特用林産利用などを通じ林業をPRすることを活動の中心にしてきた当会ですが、安全講習会は森林整備など山仕事の大変さを実感する機会となり、意義深いもので

刈払機を普段から使

1mくらいで右から左に刈り、振りまわさないことなどの基本を教わって、メンバーは「自分流のやり方が間違っていたとわかり、受講して良かった」と安全意識が高まりました。

午後は公民館に移動し座学。刈払機のエンジン部を分解して構造や点検法、手入れ法を学びました。メンバーのなかでも刈



刈払機を分解し、構造を勉強した。解説するのは講師の吉田さん

した。吉田講師の話がわかりやすく大好評で、「今まで適当にやっていたことが本格的にできるようになった」と喜びの声が上がり、これから続けて行きたいと考えています。

「能登のやまんば」

ほかにも当会の多彩な活動を紹介する前にメンバーの1人、「やまんば」こと谷口藤子さんに触れ

よぶ歳月、能登で植物の調査観察を続けてきました。

平成19年には坂本会長の恩師だ

つたことで縁ができた東京農業大学名誉教授の杉浦孝蔵氏とともに、植生が南限と北限が重なる能登で食用と分類できる山菜が200種類ほどあることをまとめました。そして自身の著書として能登の山菜とその使い方を紹介する本も出版。その優れた知識で当会を支え、

ておきます。

能登の山のどこにどんな山菜や野草があり、いつ採れるのか、くまなく記憶し、能登の山を知り尽くした人と呼ばれる谷口さんは昭和6年生まれ（現在86歳）。30歳の時、植物学者で画家の小牧旌氏に師事し、以来

盛り上げてきました。

トレードマークは幼女のような満面の谷口スマイル。「能登半島の植物を追いかけ、好きなことさせてもらって、振り返ったら面白い人生やったわ」と笑いながらも未だ自然への好奇心は衰えることはありません。講師として県内はもとより全国各地から声がかかり、今も現役で活躍中です。

山菜加工・販売 「森の幸」の活動

平成20年、能登の山菜や野菜を使った商品を作って販売する部門「森の幸」を結成しました。

手作りにこだわり、食の安全・安心を提供するとともに、女性が活動できる場を提供することで高齢化する地域を活性化し、荒廃する里山里海を保全し、能登をPRすることが目的です。

みんなで何度も集まり、味つけや見た目など試行錯誤を繰り返して商品化。漬物、キャラブキ、おやき、ジャム、アイスクリームを開発してきました。食材には良質なものを使用し、パッケージやラベルなどは経費を抑えて消費者の



葉脈だけを残して染色加工を施した葉っぱで作ったコサージュ。色のバリエーションも豊かで、商品化を検討中



安定した売れ筋のキャラブキ

手に取りやすい価格設定にするなど、主婦の感覚が生かされています。キャラブキなど人気のある定番商品でも手抜きせず材料のフキ

の幸は、女性が女性の立場で山を利用し、発信する活動でもあるんです」と坂本会長はいいいます。

山菜を地元レストランに提供し、



原材料のキャラブキを摘む。大きさや色や虫食いなど、この段階でも厳選している

を厳選し、売れ行きの良くないアイテムは廃番にし、また新しいものを開発することを繰り返しています。「森の幸は、女性が女性の立場で山を利用し、発信する活動でもあるんです」と坂本会長はいいいます。

気鋭のフレンチシェフに新しい食べ方を提案してもらい、商品開発のヒントにしたり、自らの生活に取り入れるなど、地域に根を張った活動は確かに女性ならではの。「まだ利益を上げるところまではいかないけれど、お金には代えられない充実感があるんです」と。

アテの「空中取り木」 技術講習で伝統工芸と 郷土の味を守る

アテはヒノキアスナロの
ことで能登ヒバとも呼ばれ
ています。

平成19年の能登半島地震
やその後の台風など立て続
いた災害で伝統工芸の輪島
塗も大きな被害を受けまし
た。それを支援しようと地
元の林業家たちが漆器の木
地に使われるアテの栽培に
取り組むようになりました。
3～4年を要するアテの育
苗でしたが、「空中取り木」



シェフ考案のネマガリタケのブリュレ。
予期せぬ美味しさに驚く。作り方を教わっ
たメンバーたちは家で再現してみるそう

という技術が開発され
たおかげで約半年に短
縮しました。

アテ幼木の枝にミズ
ゴケを巻いて根を生や
す空中取り木の技術。
その講習会が毎年開催
され、当会では参加者
にキノコ汁を振舞って
います。200食もの
調理はメンバーが大鍋



調理の分担や味付けなど、みんなでテキパキと慣れた手つきで

トへの参加など、紹介
しきれないほど多くの
活動を行っています。が、
当会の長年におよぶ活
発な活動は、植物学者
や林業技術者、教員な
ど、メンバーに縁のあ
る専門家を講師に招く
など、豊かな人脈に支
えられてきたと言いま
す。

新しい知識を得、生活に活かせる
ことに喜びを感じています。そし
て、坂本会長や谷口さんを中心に、
みんなが向上心を持ち、お互いを
高め合う関係を作り上げてきたこ
とが継続の力になっています。

今後は若い人も参加できるよう
工夫し、自分たちの経験や知識、
郷土の知恵を次の世代に伝えてい
きたいと考えています。

＊まとめ 編集部

穴水町林研女性部の これから

や調理器具を持ち寄り、包
丁で切る係や煮る係など役
割分担し賑やかにしています。
「能登で採れたキノコと郷
土の味付けがとても美味し
い」と大好評で地元のPR
に一役買っています。

平成15年、のと里山空港

の開港以来続け
ているツバキの
植林と整備や、
町や県の林業に
関わる各イベン



平成15年の、のと里山空港開港以来続けているツバキの植林と
手入れ。樹木医から剪定の仕方を習いながら大切に育てている

第2部

林研グループに期待！ 境界情報共有、 人材育成、定住化の支援

林研グループに期待！ 境界情報共有、人材育成、 定住化の支援

編集部

林業研究グループ（林研グループ）は、組織をより多様に、活動内容はより多彩に、広がりを続けています。全国林業研究グループの活動コンクール、林研リーダーが参加する全国林業グループリーダー研修会（全国林業後継者研修会）での報告などから、そのような傾向が読み取れます。

林家世帯の後継者層の研究組織（任意団体）が林研グループの出発点ですが、最近、林業事業体の従事者、Ｉターン者など、山を持たない（けれど山に関心がある）層の林研グループ参入が増えています。

活動については、メンバー自身の知識・技術を高める内部的学習活動主体から、メンバー以外の人たちをも対象とする普及活動へと広がってきています。

こうした変化の背景には、これからの林業、農山村社会のあり方が変わろうとする中で、林研グループという組織、活動形態へのさまざまな期待が寄せられてきたことがある、と考えます。

林業持続の土台となる林地所有情報と境界情報の共有、林業大学校・高校と連携した人材育成、地域社会の持続に繋げる定住化という３本をメインに、林研グループへの期待がどのように広がり、高まりつつあるのか、全国の活動事例から紹介します。

林研グループへの 期待の背景

林業や農村社会の変化に対応 ―林研グループへの期待が 高まる理由―

「林地台帳制度」が平成31年度から本格スタートします（改正森林法、省令・通知等で規定される情報を記載）。制度の運用主体は市町村で、国により整備・運用マニュアルが作成され、さらに今後は所有者・境界明確化活動等に対する支援が予定されるなど、準備が着々と進められています。

林業の土台は、森林所有者世帯です。世帯が所有する森林が森林として確実に受け継がれていく継続性こそ、持続可能の基礎と言えるでしょう。

わが家には、どのくらいの山が、どこにあるのか、どんな状態（施業履歴等を含め）なのか。現状を言えば、後継者世代が必ずしも把握しているとは言えません。

そこで登記簿ベースの情報を集約・保管し、森林管理に活かしていくという仕組みが市町村に設

置されつつあります。冒頭で触れた「林地台帳制度」です。

とはいっても、台帳は山主さんたちの所有者情報・境界が明らかになってこそ機能するものであり、この機会を捉えてわが家の森林情報を確認し、世帯全員で共有しておけば、将来への準備ともなりま

す。いわば森林所有情報アーカイブスであり、大事な記録が市町村にしっかりと保管・管理されることは重要なことです。

そのためには、山を一番よく知る人々の記憶が、後を継ぐ人々にどう受け継がれていくのか。山への愛着とともに、山への意志、関心を世帯や地域で共有していく重要性も見逃せません。ここにも林研グループの出番が広がっています。

後継者という言葉を広く捉えると、林業という産業を担っていく技術者、技能者という人材をどう育成するかも大きな課題です。この点から高校、林業大学校などの教育機関の役割が注目されています。その多くの事例からは地域林業関係者からの支援がいつそうの教育効果を高め、就業への働きか

地域社会持続に向けた定住化

けになることが分かっています。こうした人材育成でも林研グループへの期待が高まっています。



総会の場で境界確認の説明
(木屋平林業推進会／徳島県)



山に入る前の事前打ち合わせ
(土山町林業振興会／滋賀県)



公図などを元に、山主さん同士で境界を確認 (佐世保林業研究会／長崎県)

林研グループによる森林所有者の境界確認支援活動 「林業新知識」2017.12月号より

もう一つの大きな課題は、地域の社会的維持です。人口減少・流出に歯止めがかからないという悩みは全国農山村共通です。けれどもここに一つの期待があります。Ｕターン、Ｉターンによる参入です。

林業研究グループ（林業グループ）全国の現状（平成29年7月現在）

全国のグループ数	1,045
会員数	17,662（男性／15,017、女性／2,645）

全国林業研究グループ連絡協議会調べ

つてくれば、地域に活気をもたらすきっかけとなるでしょう。そこで、新たに地域メンバーとなった人々に、山に関心を持ってもらうのです。帰って来た林家後継者（50～60歳前後）は山の知識

しかも、比較的若い世代が家族を連れて地域へ入るのです。定年（早期退職）で帰って来た林家世帯の後継者（とその家族）。自然と生きる生活を求めてやってきたＩターン者。

や経験がありません。師匠となるべき人がいないとなれば、そこは林研メンバーの出番でしょう。Ｉターン者には、さまざまな副業と自伐型林業を組み合わせる計画を立てる例が少なくありません。全国の市町村では、自伐型はもはや定住化政策の大きな手段と位置づけられ、さまざまな支援策を打ち出しています。

そうした若者を影ながら支え、励まし、地域の師匠となるのが林研メンバーのもう一つの役割です。地域の維持、定住化政策の一翼を担う林研グループへの期待がここにあります。

スマールを活かす林業

木質バイオマス利用では、大型の発電（熱電併給を含む）システムが計画・稼働しつつあり、大型ボイラーを使った熱利用事業も立ち上がってきました。

それらと並行して、ごく小規模な木質バイオマス・エネルギー利用には潜在的な需要が相当あることも分かっています。地域のスポーツ・温浴施設、介護・福祉施設、宿泊施設などでの温水供給に小規

模ボイラー（200kW未満）を導入する事例です（参考情報／「現代林業」2017年9月号「特集 小規模分散型 温水供給の木質バイオマス利用地域戦略」）。

全国の「木の駅」活動では、小規模バイオマス施設への供給の一端を担う役割としても林研に期待が寄せられています。自伐林家も同様です。小さいながらも、地域に安定した供給先があるということと、材を出す側にとつては明確な目標となります。木の駅、自伐林家のこうした活動をより地域的な広がりとするために、林研グループへの期待が高まっています。

復興・再生に向かう仲間・絆

もう一つ忘れてはならないのが、自然災害からの復興・再生への支援です。

さまざまな自然災害に遭うことは、私たち日本人には避けては通れない宿命です。不幸にして災害が降りかかった地域では、その後の復興・再生に向けた取組を継続する林研グループの姿があります。厳しい運命は、人間一人で立ち

向かえるものではありません。孤独ではなく、地域みんなで話し合い、汗を流す。そうした時間の共有は、将来を作る強い絆となることでしよう。

林業持続の基礎づくり ―家族で山林境界情報共有を支援

「山は自分の足で歩いて、境界一つひとつを自分の絵地図に記録し、その山が辿ってきた歴史も一緒に残しておくこと」。これが境界管理の本質だと、先代が作成した手作り台帳、山の境界絵地図づくりを引継いだ岐阜県の山川弘保さん（第53回農林水産祭天皇杯受賞）は話します。

同じような思いの山主さんは他にもいることでしよう。境界を確認しておくことは、単なる事務的な作業ではありません。わが家の山の所在を現場で見て、境界を歩くなかで、「ここがうちの山なんだ」「祖父が植えてくれたからこんなに大きく育つ森になっている」。誰もがそんな気持ちにさせてくれるのが、山の姿、スケール感です。

それは、取りも直さずいずれ自分がここを守っていかなければ、という思いにさせてくれるのでしよう。親の言葉（または説教）にはついつい逆らいたくなるものですが、目の前の森の姿・自然の言葉には、素直な気持ちになれるのです。後継者としての責任感や自負、いずれはという思い。それをさりげなく生み出すことがなにより大事なのです。

林研グループが取り組んだ事例を見ていきましょう。

は、一通り山林を親子で一緒に回り、山林の場所と境界を確認でき、山林の引継ぎは終わったと思ったそうです。息子さんはその後、記憶と図面などの資料を元に、一人で山林に行きましたが、たどり着けなかったそうです。

事例1

GPSデータをパソコンに保存、後継世代に引き継ぐ境界の証し

―しんしろ林研クラブ（愛知県）

IT機器に慣れている後継者世代を対象に、境界確認にGPS、パソコン地図ソフト（カシミール3D[※]／無償で使えるフリーソフト）を応用して成果を上げているのが、しんしろ林研クラブです。

きつかけはこんな事でした。

ある林研会員が、家族の所有する山林資産を継承していくために、息子さんと一緒にいくつかの山林を回りました。父親（林研会員）

「季節が変わると山の中の風景も変わってしまい、山林の場所や境界も一度行っただけでは分からない。…いつまでも父親に頼れない、どうしたらよいだろう」と思ったそうです。

地元・新城市の地域の問題として、過疎高齢化や不在山主の増加などにより、

①山林情報を「家族」内で共有・継承することが困難。

②地域の山に詳しい人がいない。また、地域内で山の情報が共有・継承されない。

③素人山主が増加している。

このようなことから、地域山林の管理・活用（財産管理・災害対策・獣害対策）が十分に行えないといったことが起こっています。

対策として、

①「個人」の経験や知識で裏打ちされる情報（他人との共有が難



現地で調査・収集した GPS データをカシミール 3D ソフト（パソコン上）に入れ込み、地図として表示させた例（編集部作成）

これにより、境界位置を記録・表示することができ、客観化されたデータを後継者などと共有することができ、その場所へ行ったことがない人でも、過去に行った場所データ（緯度・経度）をハンディ GPS に

- ①ハンディGPSを持って山林を歩く、
- ②山林境界位置をハンディGPSに記録する、
- ③このデータを後ほどパソコンに取り込む。

大きな成果
こうした活動を継続したことで得られた成果は予想以上だったようです。

①新規会員の加入
しんしろ林研クラブ会長が、地域の森林所有者に、ハンディGPSで山林境界情報収集ができることを宣伝したところ、山林境界について困っていた人たちが興味を持ち、林研クラブへの新規加入に

入力し、山へ行くことで、山林境界位置まで案内をしてくれます。以上の手順について、しんしろ林研クラブでは、

- ・講習会
- ・個別指導（希望者の山へ同行し、GPS記録やパソコンデータ作成指導など）

を3年間にわたり行ってきました。



ハンディGPSの例（ガーミン）

②次世代が興味を持った
中学生を対象に、しんしろ林研クラブ会長他が、間伐体験指導と併せてハンディGPSについても説明し、体験をしたところ、地元中学生がハンディGPSの機能について興味を持ち、山林境界についても興味を持ちました。いずれ所有者や地元の担い手になる生徒たちが山林に少しでも興味を持つことは、今後に向けて大切な一歩ですと、林研メンバーは捉えています（出典／全国林業研究グループ

しい）を、より客観的に把握でき、しかも誰でも使える方法で収集・管理・活用を行う。

②緯・経度情報を基にする地理情報をデータで管理することなどが考えられる。

会員から「ハンディGPSというものがあるが、使い方を教えて

欲しい」と事務局に相談があり、「ハンディGPS講習会」を開催しました。これがスタートです。

データ化すれば家族で共有できる

GPSによる山林境界位置情報収集と活用方法は次のとおり。

つながりました。

②後継者に山林に対する興味をわいた
会員が山林を歩き、ハンディGPSで境界位置を記録し、ハンディGPSからパソコンへのデータ移行を息子

連絡協議会 平成24年度及び平成27年度「林業グループ活動・研究事例集」。

事例2

「山をよく知る人と歩くことで関心を高める」

―土山町林業振興会（滋賀県）

境界確認活動を実施するに当たり、まず境界明確化事業で大きな成果をあげた愛知県豊田市（2年間で1000ha以上を団地化）で林研メンバーが研修を受け、次のような点を学びました。

①事業のリーダー的存在の発掘であり、林業の再生と振興に熱意のある各地域の中心人物。行政のOBとか森林組合OBにその牽引役になってもらうこと。

②同意していただける地区から手を付けていき、焦らず点から面へと輪を広げていくこと。

③「境界」という硬い表現より「施業界」というソフトなニュアンスで進めていくこと。

④市・森林組合・森林所有者のみんなが積極的に協力をする体制づくり。

以上を踏まえ、同グループ（振興会）で事業個所の選定を行い、研修会及び事業説明会を開き、ま

たアンケートを実施して調査方法を決定し実施しました。

当日は、所有者ごとに杭を打ち決定していきましたが、他所持ちや若年所有者林については、地元の長老に昔の話を聞きながら教えていただき、両者了解のもと杭を設置していきましました。

その成果は、地域…実施面積25ha、実施者30名、会員…実施面積3ha、実施者7名でした。

この活動からは次のような点が分かってきたそうです。

①獣害柵が境界と誤解されやすい。
②親子間で境界設定に対する意識に差がある。

③先導していく人により境界設定の進み方に差ができる。

④地域で行うことにより、出役義務的に進んでいく。

（出典／全国林業研究グループ連絡協議会 平成25年度「林業グループ活動・研究事例集」）

人材育成での期待 高校、林業大学校への 支援活動

いま全国の林研グループでは、高校生や林業大学生のインターン

シップや実習を支援する活動を継続しています。

林研メンバーと一緒に現場で作業し、会話を交わす経験そのものが貴重なのです。学生は、いずれは事業体に就職し、技術者・技能者として活躍するでしょう。今日ここで話し合った山主さんは、いずれ将来の顧客層となる人々です。その姿、雰囲気慣れておくことは、就業時の役に立つ経験です。それは、地域社会の一員としての自覚、自負に繋がるものと考えます。学校内教育ではなかなか得られない財産でもあります。そんな事例を紹介します。

事例3

高校生の研修支援 有利な採材を 現場で考える

―芦北地域林業研究グループ（熊本県）

県立芦北高校林業科は地元への人材輩出で実績がある伝統校です。平成24年から同校生徒が間伐や高性能林業機械操作を実習する研修をグループでは支援してきました。林研メンバーが経営する素材生産事業体のプロセッサを用いての

造材、さらには有利な採材を考えるともらう内容です。

採材実習では、地元木材市場の最新市況データを生徒にまず配布します。それをにらみながら、どのように採材すれば利益を出せるか、実務に直結するノウハウを林研メンバーと一緒に考え、採材・玉切り・搬出作業を行います。

生徒を悩ませるのが曲がりの判定。曲がりを判断し、これを避けて造材することで売り上げをグンとのばせます。見る方向を変えながらといった試行錯誤を林研メンバーと一緒に行う中で、技術はもちろん、経営感覚をも磨いていくのです。

（出典／「現代林業」2015年5月号）

事例4

20年以上継続する 高校生インターンシップ

―上浮穴林業研究グループ連絡協議会（愛媛県）

林業・木材産業が地域クラスターとして機能する全体像を現場で理解する機会は林業を学ぶ生徒にとって貴重なものです。それを実現しているのが同協議会（4力町村単位林研が合併）です。地元上



高校生へのインターンシップ支援活動、林業で働く先輩との交流会開催
(上浮穴林業研究グループ連絡協議会／愛媛県)／平成28年度多様な担い手育成事業
「地域の担い手を応援する林研活動情報集」全国林業研究グループ連絡協議会

上浮穴高校森林環境科のインターンシップを受け入れ、同地域の特徴でもある複層林見学、チェーンソーによる間伐実習、高性能林業機械の操作実習、木材加工施設見学、地元で開発されたラティスパネル（耐力壁）を使った住宅展示場見学など、森づくりから木材加工・住宅までの学びを支援しています。さらに生徒にとって貴重な機会

が、地元林業界で働く先輩（上浮穴高校卒業生）との交流会（同協議会が実施）です。森林組合職員、機械オペレーター、森林施業プランナーとして働く先輩との会話から、就業の動機、現場作業の苦労、仕事の実際、やりがいなど、生徒が一番聞きたいことがズバリ聞けるからです。

毎年3名程度の卒業生が林業関係へ就職しており、それ以外の生徒も地元久万地域の林業・木材産業の理解者・支援者として社会に巣立っています。（出典／「現代林業」2016年1月号）

もう一つの後継者対策 — 定年林業回帰を支援

地元を出て企業等で働き、定年（または早期退職）でUターンする林家世帯の後継者層。林業の知

識・経験は乏しいものの、もともと地域のメンバーです。林業を自分の第二の仕事（「稼ぎ」）以外の働く楽しさを含め）としてもらおうと、地元林研グループメンバーが支援する活動が広がっています。

よくよく考えると、サラリーマン人生から山で生きる人生への切り替えは、自然にも思えます。年相応に自分や家族と仕事との関係に対する考えも変化し、また定年後に「引きこもる」都会生活より、むしろ地域社会とかわつて生きたい、地域に何かを還元したいという思い。それを可能にする場を持つ人は、それだけ幸せです。林家世帯後継者層であることへの意識が蘇り、地元回帰、林業回帰へ繋がるのでしょうか。

農業でも同様です。例えば、新規に自営農業を始める人は年間5万人ほどですが、実にその7割以上が50歳以上で占められています。もともと農家世帯後継者層が定年（早期退職）で地元へ戻り、新たに農業経営を始めたことの現れです。

（資料／平成25年～平成28年「新規就農者調査」農林水産省）

定年等を機会に地元へ戻る世代は、次のような特徴があります。

- ・サラリーマン時代の仕事で得た様々な知識・経験が豊富
- ・誰しも若い頃にもっているある種のとんがった部分が丸くなつており、組織内で強調・調和して働く術、安定感がある
- ・配偶者や家族を同伴する

地域のメンバーから見れば、経験豊富な人材が家族を連れて戻ってくる。後継者の大事な要素である家族がすでにいる、という意味は大きいのです。

こうした層への林業学習支援は、ある意味ではもう一つの後継者対策と言えるのかもしれません。さらに、いずれ定年を機に山をやりたいと思う現役世代に今のうちから林業を学んでもらう支援活動も重要です。

一昔と違い、みな長生きで、元気です。60歳から始めても十分時間はあります。もちろん体力は若い時のようにはいきませんが、それを補う知恵・ノウハウはたつぷり。総務・人事、経理のプロから様々な技術分野、行政部門のプロとして働いてきた人々なのですか

ら。

これは人材的にはすごいことです。ぜひ、地域の山づくり、森の利用にかかわってもらいましょう。そんな事例を紹介します。

事例5

初心者林家に個別指導 「休日林家支援」

―庄内林業研究会（山形県）

この事例は、所有する山林の整備をやりたいが、やり方などがわからない森林所有者（林研メンバー以外）に対して、林研メンバーが森林整備の指導などを行うものです。手順は、最初に指導を希望する森林所有者の現地の調査を行い、森林診断書を発行します。

次に診断書をもとに所有者と一緒に見本林を整備します。その後、整備方法を指導することとしています。

森林診断書は、樹種、林齢、平均樹高や成立本数等の情報、整備方法まで診断して作成します。

このように、森の手入れ方法が分からない所有者にとって、診断データを基にした手入れ方法の指導は、根拠がしっかりしているだけに理解しやすく、指導内容は今

後自分自身で行う学習目標ともなるものです。

（出典／全国林業研究グループ連絡協議会 平成24年度「林業グループ活動・研究事例集」）

定住化促進で地域持続に貢献 ―イターン者への 自伐型林業支援

人口減少に歯止めがかからないと悩む地域にとって、一つの光明がイターン新規参入者です。冒頭で紹介した岐阜県恵那市旧串原村では、新規参入の効果で人口減少を食い止めた事例として注目され

ます。ここにも林研グループへの期待が広がっています。

その一つが、イターンで自伐型林業（副業の一つとして）を始める若者たちへの指導役です。「現代林業」連載中の佐藤宣子先生による「自伐林業 探求の旅」では、森の手入れに関する技術的な指導

- ・住まいに関する指導・支援
- ・地域社会との交流、つながりづくりに関する支援
- ・技術が上達したイターン自伐者へ施業を発注することによる支援

などを行う地元先輩林家の姿が描かれています。

さらに、市町村とイターン自伐者を繋ぐ役割にも林研グループへの期待があります。

林務行政関係者にとって林研グループは信頼のある団体（任意団体）であり、何かにつけて行政にも頼りにされる存在です（例えば行政主催の林業関係行

事・イベントのサポート等）。そこで林研がイターン自伐者と自治体を繋ぐことに一つの意味が出てくるのです。

というのは、全国の市町村ではイターン者の自伐型林業を定住化政策の手段として重視しているからです。これを円滑に進めるために、林研グループの出席は少な

くありません。
NPO法人自伐型林業推進協会調べによると、北海道から九州までの全国27自治体が自伐型林業支援を行っています。もちろん林業振興という面もありますが、重視するのは定住化政策上での効果です。

というのは、受け入れる市町村からみると、若い世代が、家族と一緒に地域へ入ってくれる、それは働く人材としてはもちろん、子どもたちが小学校・中学校へ入ることで学校が存続できるなど、地域社会の持続にとって好影響をもたらしてくれるからです。

自伐型林業と農業、木工・クラフトなどのものづくり・販売、ガイドなど観光関係業務、建設業、飲食業など様々な副業関係を組み



現地指導状況

図 農山漁村地域への定住（移住）意向がある者の割合

農山漁村地域への定住（移住）意向がある者の割合（％）		男 性			女 性		
		H17 調査 (2005)	H26 調査 (2014)	H28 調査 (2016)	H17 調査 (2005)	H26 調査 (2014)	H28 調査 (2016)
全 体		25.7	36.8	36.1	16.3	26.7	25.0
年 代	20 代	34.6	47.4	43.8	25.5	29.7	32.1
	30 代	17.1	34.8	43.6	16.9	31.0	29.2
	40 代	18.3	39.0	32.9	14.1	31.2	24.9
	50 代	38.2	40.7	30.2	20.7	27.0	18.6
	60 代	25.0	37.8	24.2	14.6	28.8	14.6

○H17 調査：内閣府「都市と農山漁村の共生・対流に関する世論調査」（平成 17 年 11 月実施）

○H26 調査：内閣府「農山漁村に関する世論調査」（平成 26 年 6 月実施）

○H28 調査：総務省「農山漁村地域に関する世論調査」（平成 29 年 1 月実施）

合わせ、自営を歩もうとする若い家族。彼らの技術・技能向上や地域社会への参加を様々な支援する定住化促進は、市町村にとって重要な施策となりつつあるようです。「人生の楽園」への期待を受け止める―移住者への支援、定年（または早期退職）を機に田舎に移住し、農家民宿、民家カフェなどを始めた人々が登場する人気番組「人生の楽園」。それは移住を考える人々の存在を象徴するものでしょう。

都市住民を対象にした意向調査では、農山村地域へ定住（移住）意向の高まりがはつきりと見えています。具体的には、

- ・男性では、25・7％（2005）
↓36・1％（2016）
- ・女性では、16・3％（2005）
↓25・0％（2016）

で、とりわけ20代・30代の若い世代ほど高い意向が現れています（図参照）。

また、Uターン、I／Jターン者が移住した前後で感じたギャップを調査した結果からは、

- ・地域の魅力、家族・パートナーの理解、治安や防災などの安全

性は、移住前の予想より良い結果が得られたとする一方、唯一予想より悪く感じたのが「地元の人との関係性」でした。

（資料…平成26年度国土交通白書）

定住後、仕事や生活環境には満足できても、地域社会へのとけ込みにとまどう実態が見て取れます。

例えば、林研グループに入ってもらい、子どもたちの林業体験など様々なイベントと一緒に作り上げることで友人・知人ができるでしょう。移住者の奥様たちにも女性林研グループに入ってもらい、ダンナとはできない女子会の会話を楽しんだり、きのこ・山菜料理やクラフト創作を楽しんだりする中で、慣れない気持ちをほぐすこともできるでしょう。

こうした若い定住者（移住者）の存在は、地域の人口構成を変え、労働力の体質をいい方向に変える可能性があり、林研グループはそれを促進する重要な役割を果たしています。地域活性化のきっかけとなるでしょう。

第3部

私たちのチャレンジ! モノづくり、 仲間づくり

事

私たちのチャレンジ！

例

スギの葉染め体験でエコツアーリズム 東吾野女性林研ときめ木「埼玉県」

市のエコツアーに参画

埼玉県飯能市の女性林業研究会「東吾野女性林研ときめ木」（栗原慶子代表／以下、ときめ木）では、毎年、スギの葉染め体験をエコツアーとして実施しています。

埼玉県は首都圏にあり森林率は高くありません。それでも県域西側の約3分の1は山間部といえる地域で、平野部から山間部への入り口に飯能市が立地しています。飯能市は、かつては原木市場が7〜8カ所もあり、古くから林業地として栄えた地域です。その一方で現在は、森林を環境的な資源として捉え、エコツアーリズム（飯能市エコツアー）にも取り組んでいます。

ときめ木では、山村の文化や環境保全に果たす林業の役割を都市住民とともに住民に伝えたいと考え、エコツアーリズムの活動に参画

することにしました。その中で、地域の資源を有効に活用するため、スギの葉を用いた「スギの葉染め」体験を行っています。

スギの葉を煮出して染液に

用いる染液にはスギの葉を使っ



スギの葉を煮出して染液を作る

ています。スギは西川林業地の代表的な樹種ですが、近年は花粉症の原因といわれて評判を落としています。そこで、参加者に配布するチラシには「こんなステキな使い方もあるのです。それと、成長が早く、木材としても使いやすいので林業には欠かせない樹木なのです」と説明しています。女性林研ならではの優しい気配が感じられます。

染める手順そのものは一般的なものです。特徴は染液にスギの葉を使うことです。染液は、スギの葉を細かく切り、ひたひたの水を入れた鍋に入れて30分



スギの葉染め体験に参加した都市住民とともに

程度煮出して作っています。作ってから2〜3日おくと、染めた時の色つきがよくなります。

草木染めでは色の定着のため媒染液を使用しますが、ツバキの灰の上澄み液を用いるなど天然素材にこだわっています。

待ち時間・昼食にも一工夫

飯能市エコツアーのスギの葉染め体験は、8月の日曜日に実施されているので、小学生のお子さんも参加しています。参加者が煮染めや媒染工程の待ち時間に飽きない

よう、この時間に何をするかも知恵の絞りどころ。ブルーベリー狩り、地粉のうどん作りや炭酸まんじゅう作りなど、会場に応じて楽しめる活動を取り入れています。

昼食には地元の野菜を使って会員が手作りの郷土料理



煮染めの作業中



地粉でうどん作り体験



埼玉県郷土菓子・炭酸まんじゅう作り体験

を提供し、好評を得ています。林業の話題についても話しながら、環境を守るためのエコツアーが林業への理解にもつながるように工夫して活動を進めています。

◆ 地元高校の放送部が取材体験に来るなど、飯能市エコツアーの中でも、ときめ木のスギの葉染め体験は人気の定番メニューになってきたようです。これからも、女性の立場から林業と山村の魅力を発信していくことを期待しています。

＊まとめ

秩父農林振興センター
林業部

森林技術・林業支援担当
志々目千潮

(所属は執筆時)

事

私たちのチャレンジ！

例



山菜の採取研修

女性の感性で
山の資源を生かして

岩国地区林業研究グループ連絡協議会は、山口県東部地域の10グループで構成され、その女性部会は会員数52名です。時にはおしゃべりを楽しみながら、草木染め、苔玉、竹炭ペンダント、かずら細

山菜を出荷したい！

岩国地区林業研究グループ連絡協議会女性部会「山口県」



山菜の試食会。巧みなおしゃべりでもお客さんを魅了

工、竹細工等の活動を柱に女性らしい取り組みを行っています。本女性部会では、平成21年度から、無農薬で旬の食材を新鮮なうちに食べられる「山菜」の安定出荷を目指して、共同で様々な取り組み

りました。
23年度は、山菜の採取実習や栽培研修、山菜や枝物類の試験販売を実施することで山菜販売の課題を認識するとともに、山野の花木が収入源として有効であることを

を行っています。

初年度は、まず地域の山菜を把握するため、食用にできる樹木学習会や料理実習、山菜の資源量調査を行いました。22年度は、量販店のバイヤーなどに対する試食会やイベントでの試食を実施しました。山菜に対するニーズの高さを実感することができ、山菜出荷に対する意欲が高ま



販売している
セリ、イタドリ、クレソン

確認しました。24年度は、山菜や枝物類の試験販売等を継続し、実際に対面販売を重ねることで、山菜や枝物は出せば売れることを改めて認識しました。また、山ウドとコゴミの増やし方の研修を受けました。

白ウド栽培を簡易な方法で

26年度は、山ウドの栽培について、より発展的な研修を行い、会員所有の山林や畑に実際に苗を植えました。27年度に収穫について



山ウドの栽培研修



商店街の朝市「軽トラ新鮮組」での山菜・枝物類の試験販売

研修し、供給に向けて継続して取り組むこととしました。

ウドは、ウコギ科タラノキ属の多年草で、主に萌芽した若い茎を収穫して食べます。食用として香りが強く、春を感じさせる山菜として好まれます。販売されているウドには、白ウド、山ウドなどがあり、白ウドは地下室などの暗所で栽培して、全体を軟白化させたもので、市場ではより高値で扱わ

れます。

本女性部会では、この軟白化を雨どいと竹の支柱等の資材で簡易に行う方法を研修で学び、その生産に取り組み始めました。

山の産物を商品化

岩国市中心部の中通り商店街では、毎月第3日曜日に軽トラックによる朝市を開催していますが、本女性部会では、4月の山菜、12

月のクリスマスリースや正月用の枝物等の時期に絞って継続して出店しています。消費者ニーズに応える商品の検討を重ね、昨年からは会員が作った正月飾りや野菜の提供も始めるなど、地域資源を生かした取り組みへと広がっています。

今年度は、花木苗の仕立て方についての研修を行い、蔓のかごに入れて、ちよつと素敵に装った山野草や花木のポット苗を商品化で



笑顔の花咲く女性部会のメンバー

きないか、「岩国地区林業女性いどばた交流会」と称した女性部会の会合で試作するなど検討していく予定です。本女性部会の挑戦はまだまだ続きます。

*まとめ

岩国農林事務所 森林部
森林づくり推進課
主査 牛島 豪

(所属は執筆時)

事

私たちのチャレンジ！

例

樹上作業技術の研修会を開催

愛媛県林業研究グループ青年会議「愛媛県」

日本アーボリスト協会 認定の研修会

愛媛県林業研究グループ連絡協議会青年会議（以下、青年会議）は、平成4年に愛媛県林業研究グループ連絡協議会の若手会員が集まり結成され、現在、会員18名、平均年齢46歳で活発に活動しています。これまで、列状間伐の実証や作

業道開設の実践的研修、インターンシップ等、様々な活動に取り組んできましたが、平成24年度からは、議長の菊池俊一郎氏（平成29年9月から松本慎一郎議長に交代）の提案により、高所での伐採や吊りおろし作業を行う樹上伐採の技術習得に向けて、日本アーボリスト協会（JAA）認定による研修会を毎年開催しています。

なお、研修会の講師には、JAA創設メンバーの一人であるジョン・ギヤスライト氏をはじめ、国内の実力のある講師を迎え開催しており、青年会議の会員以外にも県内外から造園業や異業種の方が数多く参加しています。

リギングや樹上での チェーンソー操作技術を学ぶ



雪のため体育館で実施した
ツリークライミング研修

初年度の研修会は、高所伐採と吊りおろしのデモンストレーションを見学し、2年目には、実際の樹上作業を想定したツリークライミングの体験会を実施しました。林業の作業では、架線の索張りや枝打ち、支障木伐採など樹上に上がる機会が多いため、このツリー



研修の講師を囲んで

クライミングの技術は非常に重要であると思います。今では、多くのメンバーが樹上に安全に上がれるようになりました。3年目の研修会では、伐採した大きな枝や幹をロープ等により安全に地上におろすりギングという作業を研修しました。4年目の研修は、樹上でのチェーンソーの操作等、さらに高度な技術について研修を行いました。



スパイククライミング研修

初年度から継続して受けているメンバーについては、かなり技術力がついてきました。他のメンバーにも指導できる力が付くよう、さらに会員相互で研鑽し、技術を高め合っていきたいと考えています。

なお、こうした樹上技術の習得を通して安全意識がより高まり、普段の作業の安全技術向上や自信にも繋がっています。また、難しい伐採の依頼にも対応できるため仕事の幅が広がり、経営面でもプラスになります。

安全に資する取り組みは、自ら身を守ることに繋がります。「絶対に安全面をおろそかにしてはいけない」というのが、菊池議長の信念です。

青年会議は、この樹上作業に関



特殊な作業のため装備もいろいろ必要



断幹実技研修

する活動が評価され、平成28年度、全国育樹活動コンクール団体の部で国土緑化推進機構理事長賞を受賞しました。

今後とも伐木技術の向上と、安全作業の確立に向けた取り組みを継続して実施していくこととしています。

＊まとめ

八幡浜支局森林林業課
林業普及指導員
金柿正嘉

（所属は執筆時）

事

私たちのチャレンジ！

例

継続20年！ 小学生の駒打ち体験

菊池市内の3林研グループ「熊本県」

原木シイタケの名産地

熊本県菊池市は、大分県と接する県北部に位置し、面積の54%を占める森林は、美しい心材色で高い評価を受けるスギ挿し木品種「アヤスギ」の生産で知られています。また、県内有数の原木シイタケの生産地でもあり、乾シイタケで農林水産大臣賞受賞者を多数輩出するなど、県内のみならず、全国でも高い評価を受けています。

会員の多くもシイタケ生産

菊池市内には、龍門林業研究グループ、水源林業研究グループ、旭志林業研究グループの3つの林研があり、20〜70歳代まで幅広い年齢層の会員63人が加入しています。40歳代以下の会員が多く、林業専門はもちろん、シイタケ生産

者やゴボウ生産者、会社員など様々な会員が活躍されています。

この3林研では、菊池市の特産品であり、多くの会員が生産に携わる原木シイタケの普及に力を入れており、約20年前から毎年、菊池市内の小学生と保護者を対象に、各林研が「シイタケ駒打ち体験」を行っています。

ここでは、本年1月21日に、龍門林研グループと水源林研グループが共同で実

施した、菊池市立菊池北小学校でのシイタケ駒打ち体験を紹介しましょう。



保護者と一緒に玉切り



熱心に説明を聞く子どもたち

「シイタケを大好きになっ
てほしい！」

この活動の目的は、「シイタケを好きになっ
てもらうこと！」。
駒打ちの体験と学習を通じて、
将来を担う子どもたちに、親子で
シイタケを大好きになっ
てもらい、

地元産のシイタケを美味しく食べてもらおう、菊池の歴史や食文化を伝えていってもらおうという考えで実施されています。

当日は、菊池北小学校3年生の児童、保護者約70名が参加しました。事前に伐倒・葉枯らししておいたクヌギを林研会員と子どもたちが玉切り、穴開けし、駒を打ちました。その後、保護者も手伝って、それらを校内のクヌギ林の中に仮伏せしました。駒打ちした3年生が5年生になった頃にシイタケが発生するので、それを家に持ち帰って食べるという趣向です。



みんなで協力して駒打ち

子どもたちからは、「シイタケの作り方を初めて知った」「駒打ちは楽しかった」「頑張ってシイタケを食べようと思う」という感想が聞かれました。

また、体験終了後には、過去に児童が駒打ちしたシイタケを保護者が料理した「だご汁」「シイタケきんぴら」「シイタケ南蛮」も振る舞われ、シイタケの美味しさを堪能しました。

菊池のシイタケを次世代につなぐ

当日、講師を務めた龍門林業研



▲▶校内のクヌギ林内に仮伏せ



究グループの村上正八さんは、「シイタケ好きを増やすためには、原木シイタケ栽培のように、息の長い取り組みが必要。手間はかかるが、必ず結果は出る。シイタケを通じて、菊池市の良さも伝えられると思うので、これからも引き続き取り組んでいきたい」と語っておられました。

より多くの方々にシイタケのおいしさを伝えるべく、息長くチャレンジし続けている3林研の活動を、普及員一同、これからも支援していきます。

*まとめ

県北広域本部 農林水産部
林務課 林務班
参事 草野僚一
(所属は執筆時)

事

私たちのチャレンジ！

例

コンテナ苗の育苗技術を高める！ 茨城みらいの苗木研究会「茨城県」

若手5人で結成！

私たちが活動している那珂地域では、古くからスギを中心とした林業用苗木の生産が盛んに行われてきました。戦後の拡大造林最盛期には2000名近い生産者が6000万本を超える苗木を生産し、県内外に出荷していました。しかし、昭和50年頃からの造林面積の減少に伴い、現在では生産者21名、苗木生産本数90万本程度にまで激減し、生産者の高齢化も進んでいます。

このままでは当地域の苗木生産技術が途絶えてしまうとの危機感から、20～50代（平均38歳）の若手の後継者5名による「茨城みらいの苗木研究会」を平成28年4月に結成し、育苗技術の継承と新たな苗木生産方法としてのコンテナ苗木生産への取り組みを開始しました。

手探りで始めた コンテナ苗木生産

当会結成前の平成26年に、一部の若手生産者がマルチキャビティコンテナを使用した試験栽培を開

始しましたが、コンテナ苗の生産は初めてで、培地の作成方法や施肥、灌水方法等不明な点も多く、手探りの状況でした。そのため、生産者によって苗木の生育状況に大きな差が見られ、とても出荷できるような苗木ではありませんでした。

月1～2回の 勉強会で 技術力アップ

コンテナ苗の生産に関して一から学ぶため、コンテナ苗生産の試験研究を実施していた県の林業技術センターや林業普及指導員の指導をいただきながら、定期的な勉強会を始めました。使用する培地の種類や混合方法、

コンテナへの充填の仕方、肥料の種類とその施肥方法、追肥の時期と方法、播種や移植の方法、灌水の方法、出荷の方法等についての勉強会を月1回以上のペースで（昨年は17回）実施し、技術の習得を図ってきました。

このような勉強会を重ねてきた



育苗当初のコンテナ苗。生産者間のバラツキが大きい



「茨城みらいの苗木研究会」
会員一同

需要者へ コンテナ苗をPR

結果、現在ではスギ6万2000本、抵抗性クロマツ4万4000本を出荷するまでになり、スギは主に国有林関係、抵抗性クロマツは海岸防災林の植栽に使用されています。

コンテナ苗植栽は、国有林や海

戦後植栽された人工林が利用期を迎え、皆伐による木材利用と再造林による森林の若返りが必要とされている今、これを支えるためには苗木の安定供給が重要となります。

の会員が役割分担をして全組合に出向き、コンテナ苗の説明を行い、PRに努めました。

◆

において、当会

の試験植栽に

たコンテナ苗

組合が実施し

り県内8森林

会が主体とな

る組合が実施し

たコンテナ苗

の試験植栽に

において、当会

の会員が役割分

担をして全組合

に出向き、コン

テナ苗の説明を

行い、PRに努

めました。

このため、

昨年春に県

森林組合連合

会が主体とな

る県内8森林

組合が実施し



勉強会の様子（コンテナへの植え付け）

岸防災林の造

成に用いられ

ているものの、

その歴史は浅

く、一般の森

林所有者の認

知度は低いと

いわざるを得

ないのが本県

の現状です。

このため、

昨年春に県

森林組合連合

会が主体とな

る県内8森林

組合が実施し

たコンテナ苗

の試験植栽に

において、当会

の会員が役割分

担をして全組合

に出向き、コン

テナ苗の説明を

行い、PRに努

めました。

このため、

昨年春に県

森林組合連合

会が主体とな

る県内8森林

組合が実施し



出荷用のコンテナ苗

このため、
当会ではコン
テナ苗を含め
た苗木の安定
供給が可能と
なるよう会員
が丸となった
て苗木生産に
取り組むとと
もに、特に、
裸苗に比べて
値段が高いと
いわれている
コンテナ苗の
効率的な育苗



試験植栽の様子

技術の開発を進め、安価で森林所有者の方々が安心して植栽できる苗木の生産に努めていきたいと考えています。

＊まとめ

会長 根本和典

事

私たちのチャレンジ！

例

体験しながら学ぶ

いちほさま

「一迫林間学校」

一迫林業研究会「宮城県」

体験しながら学ぶ 林業の学校

「一迫林間学校」は、身近な森林に触れ合うことで森林・林業への理解を深め、林産物の需要を喚起するため、一迫林業研究会（以下、当会）が取り組んでいる「林業の学校」です。

今年3月12日（日）、栗原市の原風景といえる水車のある風景を復元し、東日本大震災からの復旧・復興・発展を林業の力で盛り上げるため、第33回「一迫林間学校」が開催されました。スギ間伐材を利用した水車づくりを目的に、県内公募による参加者とスタッフを合わせ総勢30名（子ども2人含む）で実施しました。

会場は、地元で奥さんが酒造り

を営む元県林研連会長の門傳仁氏の自宅前が開放されました。当会の高橋勇記会長、共催者・協力者・参加者のあいさつと自己紹介に続き、作業が開始されました。

参加者が 自分で考えて作る

車軸とボルト、4m強の角材40本と2m弱の板材10枚から水車2基を製作します。水車の設計図はありません。まず角材6本を同じ長さに揃えて半分に切ることを2回、次いで角材4本を1/3ずつ分割、さらに角材2本を1/6に分割します。ただし、コンベックス

や定規の類いを使ってはいけないルールです。いくつかのアイデアが浮かんでは消えていきます。

一番短い角材を幅木に、中くらいの長さの角材を横木にし、ボルトの固定は、出来形合わせです。

当会員で、独特な農業経営を営むことから郷土で有名な齋藤政憲氏が先生を務めます。「私



水車の材料（角材・板材・車軸ほか）



参加者と齋藤先生（手前）と
林研会員



ボルトで繋ぐと水車らしくなってきた



羽を切り出す

の言うとおりにつく
ること」と言ってお
きながら、事細かく
は指示しません。「先
生。先生の言ったこ
とと違うこととしてま
す」には、「いいの
いいの。俺は、指示
は出したのだから」
「ただし、墨出しは
きちんとしてけら
いん。後は、切るの
は腕次第だからさあ」
と笑いを誘ったりし
ます。「この懐の深
さが、林研の持ち味
なんだよな」と感じ
る今日この頃です。
大事などころはき
ちんとアドバイスし
ますが、答えを教え
ないで、参加者に頭
を使わせるのが齋藤
流です。
昼食には、門傳家
の玄米に手作りカ
レーとサラダ、協力
者の建築工房零から
自社販売のピザ金を

用いた手作りピザが提供されまし
た。
フレームが出来たら水路に運び
ます。とても重く、せつかくつくつ
た水車が壊れてはいけないと、こ
のときばかりは齋藤先生も細かい
指示を出します。羽は壊れやすい
ので水路脇の支柱にフレームを固
定してから取り付けます。
**田園のランドマークが
復活**
のぼり
織と水車の前で、参加者全員で
記念撮影をしました。真ん中の髭
のおじさんが齋藤先生です。齋藤



水路に設置

先生からは「子ども
たちは午後3時に作
業を終えるのに、大
人にやらせると午後
4時までかかる。大
人は、言われたとお
りにしないから」と
大人の悪いところを
指摘されたものの、
参加者からは「また
やりたい」「仙台市
でもつくりたい」「水
車が自分の分身のよ
うで嬉しい」と、と

ても好評でした。こうして、宮城
県栗原の地にランドマークが復活
しました。

当会の諸先輩方が築き、継続し
てきた林間学校が33回を迎えたこ
とは、大変意義深く、感慨もひと
しおです。地域に定着しているこ
うした活動が、ゆく川の流れの如
く、新陳代謝を図りつつ継続され
ることを祈っています。

＊まとめ

フォレストー(宮城県)

佐々木周一

事

みんなで作ろう！

例

間伐材のゲーム盤(ウッドソリティア)

根来山げんきの森林業研究会「和歌山県

「森林からの恵み体験」

根来山げんきの森林業研究会は、和歌山県北部の和泉山地南麓に広がる和歌山県立森林公園「根来山

遊び方

げんきの森」を活動拠点とするグループです。「人が育てる森 人を育てる森」を合い言葉に、森林の整備や森林を活用した体験指導などの活動を行っています。

毎年9月から2月まで、多くの小学生を対象に、森林・林業に係る出前教室や「森林からの恵み体験」(森林・林業教室)を実施しています。「森林からの恵み体験」で人気の木工指導の一つ、間伐材のゲーム盤作り(ウッド・ソリティア)を紹介します。

材料と道具

【材料】

○ヒノキ間伐材 直径11～14 cm

○丸棒(直径1 cm) 樹種は問わない

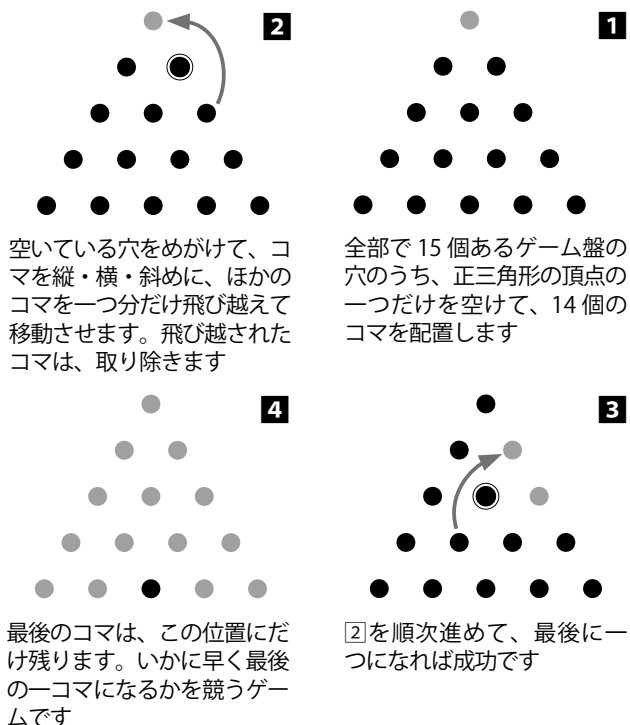
※ゲーム盤に加工するヒノキの間伐材は、ひび割れ防止のため、間伐後1年以上は、適当に湿度のある場所(日陰の床下など)で陰干しする。

【使う道具等】

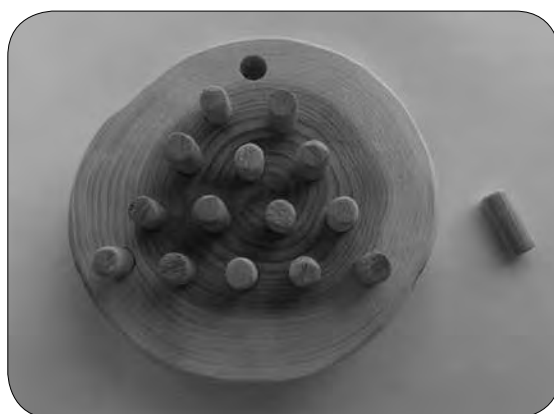
ノコギリ、サンドペーパー、ベルトサンダー、卓上ボール盤(ドリル)、テンプレート(コマの位置に穴を開けた透明な板)

作り方

①ヒノキ間伐材は、ノコギリで3・



※隣りのコマがない場合は、動かすことができません。必ず一つのコマを飛び越すように動かします。多くの場合コマが3～4個ほど残り、「成功」になりません





③テンプレートを置き、穴
開け位置に印を付ける



④卓上ボール盤（ドリル）
でコマの穴を開ける



⑥コマをつくる（丸棒を切
る）

5 cmの厚さに切り、円板状にする。
②円板の皮をヘラなど使用して剥ぐ（ベルトサンダーを使用すると早くできる）。
③円板の上にテンプレートを置き、15カ所の穴開け位置に印をつける。
④卓上ボール盤（ドリル）で円板に15個の穴（穴の直径1・1 cm、

深さ1・5 cm）を空ける。
⑤サンドペーパーやベルトサンダーを使用して、円板を磨いたら、ゲーム盤の完成。
⑥コマは、直径1 cmの丸棒（ホームセンター等で購入してもよい）をノコギリで長さ3 cmに切って作る。全部で15個作る。
※たくさんコマを作る場合は、左の写真のような切り台を作つて

おくと便利です。
⑦コマは、サンドペーパーで両端を磨く。
ゲーム盤は、ヒノキがよく適しています。ただし、ひび割れしないよう保管には注意が必要です。また、コマの材料に、樹木の枝等を利用するのも面白いと思います。いろいろと工夫して遊んでみてください。

根来山げんきの森林業研究会の
メンバー



*まとめ
那賀振興局農林水産振興部
林務課 林業普及指導員
西 弥生

（所属は執筆時）

事

私たちのチャレンジ！

例



とちまるショップでの販売の様子。日本的で可愛い小物が外国人にも好まれる

東京のアンテナショップでクラフト販売 こもれびの会「栃木県」

森育・山育活動を
展開

私たち「こもれびの会」（会員42名）は設立から22年を迎え、①森の恵みを伝える活動、②地域の食材を活かした食育、③とちぎの食文化の伝承、④若者の育成・女性活躍の推進の4つを活動の柱に「森育・山育活動」を展開しています。

「森の恵みを伝える活動」では、木の実や草木を使った小物作りにチャレンジし、私たち自身がものづくりを通して森の魅力に気づき、楽しみを覚え、商品化できるようになりました。現在は、東京にある栃木県のアンテナショップ「とちまるショップ」で販売を行っています。この取り組みについて、ご紹介します。



人気商品。右からブドウの蔓のペンダント、どんぐりのブローチ、ヒノキのたわし

審査を通過し、
アンテナショップでの
販売開始

自然の魅力を都会の人たちにも感じてほしいと願い、平成25年、とちまるショップのイベントス

ペースを利用して、森の魅力の広報活動を数回行いました。栃の実を配ったり、クラフト体験を行いました。あまり手ごたえを感じられませんでした。その時に、とちまるショップの店長から、審査を通れば常時販売ができる「チャレンジショップ」制度を紹介されました。お店の方でも、地域性のある手作りの作品に興味があったようです。会員の中に小物作りやクラフトが上手な人がいたので、手ほどきを受けながら作品作りが始まりました。また、新たな商品作りとして、外部講師をお願いして講習会も重ねました。

売れる商品と価格設定

素材は身近にあるものを使い、ポップやシールは手作りしています。最初はあまり手を加えない自然のものも販売してきましたが、付加価値のついた完成度の高い商品のほうが好まれることが分かりました。

人気商品は、ヒノキのかんな削りを利用した「ヒノキのたわし」、シックな「ブドウの蔓のペンダント」「どんぐりのブローチ」な

どです。すべて手作りのため、大量生産はできませんが、どれも愛情のこもった一品です。

初めは値段を考えないで納品していましたが、店長から「100円ショップの安物と競合しない商品を作り、適正な値段設定をするように」と指導いただきました。定期的

にとちまるショップと連絡をとったり、訪問して情報収集し、販売状況を確認しています。また、季節やイベントに合わせて商品を納品しています。

クレームも一度ありました。返品になった商品の山を見て、販売することの難しさを感じましたが、もっと良い物を作りたいという意欲も湧きました。

製作者の自己満足では商品は売れません。場所柄と客層などのマーケティング戦略も必要になってきます。



定例会での製作作業

商品作りの楽しさ

製作は月1回程度の定例会で行っていますが、急に作業が必要な時は、その都度集まって製作したり、自宅に持ち帰って作業したりしています。会員も皆で考えて商品にしていく楽しさで、まめな会合も気にならなくなっているようです。私たち自身も山を見る目が変わりました。道端の木の実や小枝を見ては、何かに生かせないかと発想するようになりました。これからは、栃木へ観光で訪れ



会員と事務局スタッフ

てくださった方々に「栃木の思い出のお土産」として販売できないか考えています。手に取った小さな商品から、山の息吹、栃木の自然を感じていただけたら嬉しいです。

今後も、女性ならではの感性とパワーで、様々な人とながりがら、楽しく活動が続けていきたいと思っています。

*まとめ

会長 高橋清子

事

私たちのチャレンジ！

例

特産タケノコ「ニガタケ」の島外出荷

種子島姫竹古田生産組合「鹿児島県」

甘みがあり美味しい

種子島姫竹古田生産組合は、鹿児島県の種子島で愛されている特産のタケノコ「ニガタケ」（和名はリュウキュウチク）を通して、組合員の経済的および社会的地位の向上を目指すとともに、竹林生産力の増大を図ることを目的に、平成24年に発足しました。現在は17名の組合員が、ニガタケの魅力を届ける活動をしています。

ニガタケは、名前の由来のひとつに「よその人にとられないようにわざと苦いタケノコと呼んできた」とあるように、軟らかな食感とトウモロコシのようなほのかな甘みのある、アクのない美味しいタケノコです。最盛期は春ですが、秋にも収穫できます。調理方法は、軟らかな穂先の天ぷらがおすすめで、炒め物や煮物の食材としても食卓を彩っています。



共同で皮を剥く

島外出荷、ウェブでPR

ニガタケは新鮮なほど「うまい」のですが、皮を剥いてしまうと鮮

度が落ちるため、県外等への大量出荷が難しく、島内における自家消費が主体でした。

そこで、平成24年度に冷蔵施設を導入し、冷蔵の宅配便を利用するなど鮮度の維持に努め、主に個人への発送（島外への出荷）を始めました。25年度からは、その細長い形とロケット発射の島にちなんで「ロケットダケ」と命名し、島外への売り込みを盛り上げています。28年度の島外出荷量は458kgでした。お客様からは、風味の良い季節の食材として、高い評価を受けて



ニガタケ（和名：リュウキュウチク）

います。

島外の消費者へのPRは、地元「浜島商店」のホームページ等によるインターネットでの発信を行っているほか、地元マスコミにニガタケ出荷のニュースを取り上げてもらうなど、情報発信に努めています。



収穫の様子を地元マスコミが取材



冷蔵して鮮度を維持



島外へは冷蔵宅配便で出荷

地元小学校 での 食育体験

古田校区は、種子島の中でも有数のニガタケ産地であることから、小学校の給食の食材として提供するとともに、地域の子どもたちへの食育体験を実施しています。

ニガタケはタケノコを手で折って収穫した



食育体験で調理を行う

のち、何枚も皮を剥ぐ作業がありますが、自宅で皮むきを手伝っている子どもは手際もよく、ニガタケの味噌汁や煮物等の試食の時には、みんな笑顔になって「やっぱり、いつ食べてもニガタケはうまかなー」と評判でした。自分たちの校区が大切にしている特産物に触れ、古田とニガタケを一段と好きになってくれたようです。

子どもたちが未来の生産者に

＊まとめ
種子島姫竹古田生産組合
事務局長 濱島英人

らも、生産組合が丸一となつて、地元を元気にするために、明るく楽しくニガタケの魅力の発信を続けていけるよう活動に取り組んでいます。

なつて、ニガタケのおいしさを発信してくれるよう期待しています。

事

私たちのチャレンジ！

例

親子キャンプで森林づくり体験

東京都林業研究グループ連絡協議会「東京都」

東京にもある豊かな自然を
フィールドに

東京都林業研究グループ連絡協

議会は昭和42年に設立され、現在、東京都西部の多摩地域にある5市町村に女性林研を加えた6林研で運営されています。都の面積の約

4割は森林で、当会は、都市住民に東京の森林や林業への理解を深めてもらえるよう、各種イベントを通じた普及啓発活動にも取り組んでいます。

その一つで、平成4年から毎年開催している「森林づくり親子体験キャンプ」を今年も西多摩郡檜原村で小学生の親子を対象に実施したのでご紹介します。

「自然の宝庫」「東京の奥座敷」とも言われる檜原村を拠点に活動する「檜原村やまびこ会」は、昭和38年に設立された都内最古の単位林研で、現会員数は34名です。当キャンプは、このやまびこ会が主体となって実施しました。

下刈り体験と清流遊び

7月30日10時半、参加者27名はJR五日市線の終点武蔵五日市駅に集合後、バスでキャンプ地のコ

テージに向かいました。小雨の中、まずは近くの山林に移動して下刈り体験です。当会会員の指導のもと、カマの扱いには不慣れながらも、親子で力を合わせて作業に汗を流していました。また、会員が間伐を実演し、子どもたちはロープで引く作業を手伝いました。参

カマを使って下刈り体験



マスのつかみ取り

加者からは「下草刈りなど貴重な体験ができて良かった」「作業が意外と大変なことが分かった」という声がありました。

かき氷を食べてひと息入れた後は、子どもたちは水着に着替えてコテージ近くの秋川で川遊びです。あらかじめ会員が川岸に石で囲いを作り、その中に用意したマスを放してつかみ取りを行いました。都会の喧騒を離れ、木々に囲まれた清流での川遊び

木・多摩産材でティッシュ箱やしゃもじ作りに挑戦です。木の肌触りが心地よいのか、しゃもじにヤスリ掛けしながら参加者同士で談笑する姿が印象的でした。昼食前に子どもたちは再び川遊び。セミの声と子どもの歓声が入り交じり、夏らしいひと時となりました。昼食の後、会員から閉会の挨拶があり、バスで駅に向かい解散しました。

「東京の林業について学べた」「こんなに良い環境があると知らなかった」「非常に良いプログラムで、親子ともに楽しく学び、体験できた」などの感想があり、参加者にとっては思い出に残る時間を過ごせたのではないだろうか。

を思う存分満喫した様子でした。夕食はカレーライスと、つかみ取りしたマスの串焼きで、食後は花火で夏の夜を堪能しました。

東京の木で木工体験

翌日はラジオ体操に始まり、朝食後、糸ノコやベルトサンダーで木工体験を行いました。時々会員が手助けしながら、東京の



木工体験で糸ノコに挑戦



多摩産材で作ったティッシュ箱



説明を行う「檜原村やまびこ会」会員

当会では、東京の森林や林業への良き理解者を少しずつでも増やせるよう、今後も活動が続けていく予定です。

*まとめ

東京都森林事務所 森林産業課

事

私たちのチャレンジ！

例

デパートのイベントで林業の情報発信 静岡市林業研究会「静岡県」

デパートで 丸太切り体験イベント

静岡市林業研究会では、林業の発展のためにさまざまな活動に取り組んでいます。

平成28年度より、静岡市内の主要デパートの一つである静岡伊勢丹の「グローバル・グリーンキャンペーン」に協力しています。グローバル・グリーンキャンペーンとは、地域の環境や地域の人々に貢献でき、自然とつながる生活の提案等を店頭で行うという企画です。

当会の会員が伊勢丹のスタッフと話す機会があり、「自分は林業をやっています」



林業ウェアを着てイベントに協力

「と話したところ、「後日、店内のキッズコーナーで丸太切り体験のイベントを行ってもらえないか」と打診がありました。この話をきっかけに丸太切り体験イベントを開催、さらにグローバル・グリーンキャンペーンへも参加することになったのです。

他のグループとコラボして 装飾やイベントを実施

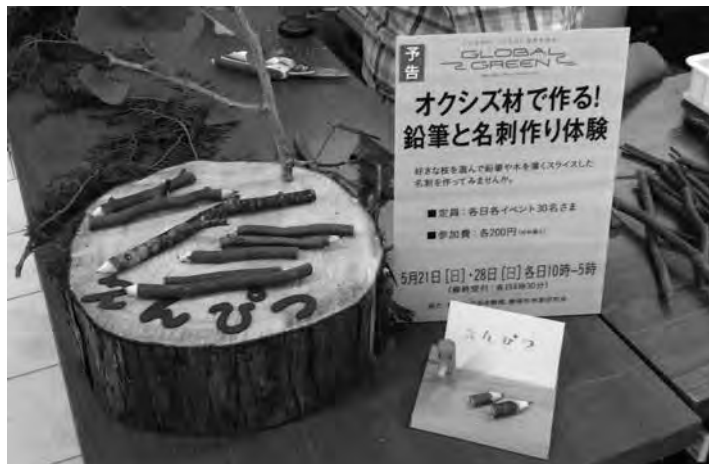
グローバル・グリーンキャンペーン（平成29年度は5月17～30日に開催）では、当会だけではなくオクシズネット（静岡市内の製材業者で立ち上げた団体）、林業女子会@静岡と共同で、伊勢丹の正面玄関の装飾と、店内装飾、また体験イベントを行いました。

正面玄関の装飾では、オクシズ材（静岡市産材）を利用した木組みの装飾を設置し、スギ玉を手作りして店内の装飾へ使用しました。体験イベントでは、小枝を使ったオリジナル鉛筆作りを行いました。また、伊勢丹スタッフの提案で、静岡市内の山林に集音マイクを設置し、鳥の声や風の音を正面玄関にてライブ配信しました。

さらに、このキャンペーン期間のプレミアムフライデーとなる5



デパートの正面を
地域材の木組みで装飾



小枝を使ったオリジナル鉛筆作り



手作りのスギ玉で売場に緑を演出

月26日には、伊勢丹とキリンビールの共催で、ビールを一杯100円で販売するイベントを行っており、当会員も正面玄関にて林業作業用防護服を身にまとい、イベントのお手伝いをしました。

林業界や地域に新しい風を

このキャンペーンにより、静岡市の中心市街地で一般の

方々へ木材の良さ、林業という仕事について発信することができました。今までの林業界にはあまり無かった、新しい視点による取り組みができたのではないかと自負しています。こうした新しい試みが、今後の林業界の発展には欠かせないのではないかと感じます。



キッズコーナーでのイベントをテレビ局が取材

今回の伊勢丹とのコラボ事業は、当会の力だけでは到底成し遂げることができないものでした。行政、外部団体との協力があってこそ、良い結果を残すことができたのです。このように、一人では出来ないことも、さまざまな考え方、異なった特技を持った仲間へ相談すれば、成し遂げることができ、そうした人間関係を築くことが、林業界のみならず、新しい風を吹かせるには必要なことだと思います。

＊まとめ

静岡市林業研究会
事務局 嵯峨美里

平成29年度多様な担い手育成事業 実施グループ一覧

グループ名	活動内容	対象学校
北海道 北海道林業グループ協議会	インターンシップ、交流会、女性林業者への安全研修会	岩見沢農業高校、帯広農業高校、旭川農業高校
青森県 青森県林業研究グループ連絡協議会	交流会	五所川原農林高校
青森県グリーンマイスター協議会	インターンシップ	
岩手県 貝守林研Jr	森林・林業体験学習	
岩手県 西和賀町森林組合青壮年部	インターンシップ、女性林業者への安全研修会	西和賀高校
宮城県 仙南フォレストクラブ	インターンシップ	柴田農林高校
宮城県 鳴子林業研究会連絡協議会	インターンシップ	小牛田農林高校
秋田県 津山町林業研究会	インターンシップ、森林・林業体験学習	古川工業高校、石巻工業高校
秋田県 北秋田森林・林業振興会	インターンシップ	秋田北鷹高校
山形県 山形県林業グループ連絡協議会	交流会	庄内管内の高校生
山形県 庄内林業研究会	インターンシップ	
福島県 村山市林業クラブ	森林・林業体験学習	
福島県 福島県林研グループ連絡協議会	森林・林業体験学習	
茨城県 ★田人林業研究会（40頁）	森林・林業体験学習 女性への林業就業の働きかけ	
茨城県 館岩地区林業振興協議会	女性林業者への安全研修会	太子清流高校
栃木県 ★茨城県林業研究グループ連絡協議会（8頁）	インターンシップ	鹿沼南高等学校
栃木県 栃木県林業振興協会	インターンシップ	ICSカレッジオブアーツほか
日光地区木材流通研究会	インターンシップ	清洲第2小学校、上粕尾小学校
鹿沼地区林業振興協会	森林・林業体験学習	宇都宮大学等
日光市林業振興会小来川支部	インターンシップ	宇都宮大学等
今市里山育成会	インターンシップ	那須拓陽高校等
★大田原市林業振興会（32頁）	インターンシップ、森林・林業体験学習	
フォレストワーカースクラブ@とちぎ	森林・林業体験学習	宇都宮大学等
みかも千年の森づくり会	インターンシップ、林業体験学習	秩父農工科学高校
NPO法人フォレストぐんま	インターンシップ	
群馬県 ★埼玉県森林協会林業研究グループ部会（12頁）	森林・林業体験学習	
埼玉県 埼玉県林業研究会	森林・林業体験学習	君津青葉高校
千葉県 千葉県林業研究会	インターンシップ	多摩工業高校
東京都 千葉県林業研究会君津支部	森林・林業体験学習	
東京都 特定非営利活動法人青梅林業研究グループ	インターンシップ	
神奈川県 八王子市林業研究会	森林・林業体験学習	
神奈川県 南足柄市森林ボランティア協議会	森林・林業体験学習	
富山県 富山県林業研究グループ協議会	森林・林業体験学習	
富山県 魚津地区林業研究グループ協議会	森林・林業体験学習	
石川県 石川県林業研究グループ連絡協議会	森林・林業体験学習	
石川県 富来林業研究会	インターンシップ	志賀高校
輪島市林業研究グループ	森林・林業体験学習	大聖寺高校
加賀市林業研究グループ	インターンシップ	
★六水町林業研究会女性部（44頁）	女性林業者への安全研修会	
★山梨県林業研究グループ連絡協議会（16頁）	インターンシップ	県立農林高校
長野県 長野県林業研究グループ連絡協議会	インターンシップ、女性林業者への安全研修会	県下高校
長野県 佐久林業士会	インターンシップ	佐久平総合技術高校、小海高校
諏訪林業士・GM会	森林・林業体験学習	岡谷市立湊小学校
上伊那林業士会	インターンシップ	上伊那農業高校
南信州林業研究会	インターンシップ	下伊那農業高校
木曽林業研究グループ連絡協議会	インターンシップ	木曽青峰高校ほか

平成 29 年度多様な担い手育成事業 実施グループ一覧

グループ名	活動内容	対象学校
長野県 長野県林業研究グループ連絡協議会	インターンシップ	長野西高校中条校
四賀林研グループ	森林・林業体験学習	
★NPO法人北信州の森林と家をつなぐ会（20頁）	インターンシップ	下高井農林高校
岐阜県 高鷺町林業グループ	森林・林業体験学習	森林文化アカデミー
★加子母優良材生産クラブ（24頁）	インターンシップ	飛騨高山高校
高根町林業改良クラブ	インターンシップ	
静岡県 大井川地区林業研究協議会	森林・林業体験学習	安芸農林高校
愛知県 愛知県森林協会林業研究グループ分科会	インターンシップ、森林・林業体験学習	猿投農林高校
★額田林業クラブ（36頁）	森林・林業体験学習	田口高校
愛知県指導林家連絡協議会	インターンシップ	久居農林高校
三重県 三重県林業研究グループ連絡協議会	インターンシップ	
松阪林業研究会	森林・林業体験学習	
熊野林星会	インターンシップ	北桑田高校
京都府 京都府林業研究グループ連絡協議会	森林・林業体験学習	
船井林業友の会	インターンシップ、森林・林業体験学習	りら創造芸術高校、南部高校龍神分校
和歌山県 和歌山県林業研究グループ連絡協議会 女性林研部会	インターンシップ、女性林業者への安全研修会	松江農林高校、出雲農林高校、出雲西高校
島根県 特定非営利活動法人もりふれ倶楽部	インターンシップ	智頭農林高校
鳥取県 鳥取県林業研究グループ連絡協議会	森林・林業体験学習	
岡山県 新見市神郷女性林研グループ	インターンシップ、女性林業者への安全研修会、女性への林業就業の働きかけ	山口農業高校・萩商工高校
山口県 山口県林業研究グループ連絡協議会		
徳島県 徳島県林業研究グループ連絡協議会	森林・林業体験学習	
穴吹木生会	インターンシップ	城西高校神山分校
愛媛県 かみやま林業振興会	インターンシップ、森林・林業体験学習	西条農業高校・上浮穴高校
愛媛県林業研究グループ連絡協議会	インターンシップ、森林・林業体験学習	八女農業高校
福岡県 黒木町林業振興会	インターンシップ	行橋農業高校
京都府 京都府林業研究グループ	女性林業者への安全研修会	
福岡県 福岡県林業研究グループ連絡協議会	女性への林業就業の働きかけ	
福岡県 福岡県林業研究グループ連絡協議会	インターンシップ、交流会	諫早農業高校
長崎県 長崎県林業研究グループ連絡協議会	森林・林業体験学習	
熊本市 熊本市苗木生産グループ	交流会	
熊本県 熊本県林業研究グループ連絡協議会	森林・林業体験学習	
高森町林業研究クラブ	インターンシップ	矢部高校
★上益城地区林業研究グループ連絡協議会（28頁）	インターンシップ	八代農業高校泉分校
八代地区林業研究グループ連絡協議会	インターンシップ	芦北高校
芦北地域林業研究グループ	インターンシップ	南陵高校
球磨地区・普及林研グループ連絡協議会	森林・林業体験学習	
大分県 大分県林研グループ連合会	森林・林業体験学習	門川高校
宮崎県 門川町林業研究グループ連絡協議会	インターンシップ	
美郷町林業研究グループ連絡協議会	森林・林業体験学習	
椎葉町林業研究グループ	森林・林業体験学習	
鹿児島県 西諸島地区林業研究グループ連絡協議会	森林・林業体験学習	
鹿児島県 鹿児島県林業研究グループ連絡協議会	インターンシップ、女性への林業就業の働きかけ	伊佐農林高校

★は、本情報集第 1 部で紹介しているグループ。グループ名の下に数字は紹介頁をさす。

編集スタッフ——白石 善也
石井 圭子
吉田 憲恵
本多 孝法
高橋 香織

レイアウト——森本 唯

装丁——クリエイティブ・コンセプト（根本眞一）

平成 29 年度
多様な担い手育成事業

技術を学び 仕事を知る
地域の担い手を応援する林研活動情報集

発行——2018 年 3 月 15 日

発行者——田爪 弥栄

発行所——全国林業研究グループ連絡協議会(全林研)
〒 107-0052 東京都港区赤坂 1-9-13 三会堂ビル
電話 03-3583-8407
FAX 03-3583-8465
webサイト <http://www.ringyou.or.jp>

編集——全国林業改良普及協会

印刷・製本所——松尾印刷株式会社

Printed in Japan

- 本書に掲載される本文、写真のいっさいの無断複写・引用・転載を禁じます。
- 著者、発行所に無断で転載・複写しますと、著者および発行所の権利侵害となります。